

---

# クロニクルズクロニクル ~ eight irregulars ~

芦高

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クロニクルズクロニクル ｝ e i g h t i r r e g u l a r s ｝

### 【Nコード】

N2879Q

### 【作者名】

芦高

### 【あらすじ】

勇者も魔王も出てこない平穏な世界。その世界に暮らす8人の若者たち。平凡だが何かと不幸な少年剣士。快活でゴーイングマイウェイな武道家の少女。飄々とした天才エロ少年。真面目なのは態度だけの軍人。

記憶喪失の上にながりの天然な娘。男勝りな海賊少女。逃亡中の犯罪組織の下っ端構成員。ヘタレな科学者。そんな彼らがそれぞれの目的のために、とある危機へと立ち向かう。剣と魔法と科学とその他諸々詰め込まれた、そんな何の変哲もないファンタジー。シリア

ス控え目、基本ライトなノリで進めていきます。チート、最強、及びハーレム展開もなしなのでその辺にご注意を。

それは、彼らにとっての始まりの物語。  
空白の歴史の、最初の1ページ。

### 《プロローグ》

とある研究機関。おそらく本来は稼動していない時間なのであろう。  
電灯の消えたその廊下を一人の青年が足早に歩いていく。

「確か、この先にあつた筈だ・・・」

そうひとりごちる彼は白衣を纏っており、研究者のようであつた。  
顔には焦燥感が滲み出ており、動きも拳動不審。何かを探している  
ようだ。

やがて目的のものを見付けたのか、ある部屋の前で立ち止まる青年。  
その部屋の扉には大きく『立入厳禁』と書かれている。

彼はそれを見ると苦々しげに「判つてるよ・・・」と呟き、持って  
いた鞆から小さな端末を取り出した。

そして扉の横、セキュリティのために設けられているのであろうそ  
の場所に端末から伸びたコードを差し込み、なにやらカタカタと操  
作し始める。

数分ほどで、端末のモニターに『unlock』の文字が並ぶ。

「ふー・・・」

憂鬱そうにため息を吐く青年。あとはEnterキーを押すだけである。彼は再び扉を見つめ、震える指でキーを押す。

ゆっくりと開いていく扉。あくまで暗い顔の青年。

「何でこんなことに・・・」

そう呟いても扉は開く。

それでも、扉は開いてゆく。

それでも、足を踏み入れる。

やがて来る、恐るべき未来を、変えるために・・・。

## 《第1話》

少女が少年を起こそうとしている。

少年の自室なのだろう。部屋の3割ほどを占めるベッドの上で少年が眠っており、その脇で少女が少年の名前を必死に呼んで揺すっている。

「カイン！カインってば！ほら、もう起きて！」

カインと呼ばれた少年はまどろみの中考えた。

これはアレだ。幼馴染の少女が「しょうがないんだから！」とか言いつつも甲斐甲斐しく起こしに来てくれる、っていうよくあるシチ

ユエーションだ。やったぜ……。そんなくだらないことを考えながら、とりあえずこの甘酸っぱいひと時をもう少しだけ、と思いなから「あと5分……」と変わらぬ惰眠を貪ることを少女に伝える。もちろん目は開けていない。

少女はそんな少年の様子を見ると、「いいよもう、起きないんならこつちにも考えがあるよ!」と窓へと向かっていく。

そのまま窓を開けた少女は、穏やかな朝日が降り注ぐ街並みに向かって息を吸い込み話し始めた。

「え、皆さんおはようございます。突然ですが、この部屋に住むカイン・ストリーム君17歳はベッドの下やクローゼットの中、更には天井裏などに所狭しと何十冊ものエ」

「やめーい! 起きるからー! 適当な嘘を街中へと叫ぶなあ!」  
残念ながら、少女の独白はこれからというところで飛び起きたカインの糾弾によってかき消されてしまった。

「起きちゃったか。残念」  
ベッドへ向き直り、悪びれもせずに残念がる少女。

「俺はこの予想外の展開が残念でならないよ」

それに対して悲痛な感想を漏らすカイン。

「これからがいいとこなのに」

「もういいから……。で、ユエ、いったい何の用なんだよ?」  
さっさとさっきのことを忘れたのか少女の訪問理由を尋ねるカイン。

「え、忘れたの? 昨日、ヒイロ君と3人で森に行くって言うってたじゃん!」

ユエと呼ばれた少女は信じられない、と責める口調で答えた。

それを聞いたカインは昨日のやり取りを思い返す。そういえばそんなこと言ってたような……。

「あ、そっか。ごめんごめん、忘れてた」

今ひとつ思い出せなかったカインは、きつと言ってたんだろうなと思ひ、正直に謝る。

「もう！ じゃあ、早く準備して降りてきてよね、下で待ってるから！」  
少女はそれだけ言うと部屋を出て行った。おそらくいつものように家の前でヒイロと待っているのだろう。  
カインは、あまり待たせてさっきの二の舞はごめんだとばかりにすぐに外出の準備に取り掛かりだした。  
やはり昨日の約束は思い出せないでいたが、準備に夢中で気にしないことにした。

服を着替え、居間に下りて顔を洗い、朝食を食べ……。

「あれ？ 母さん、俺の朝ごはんは？」

そこでカインは、ダイニングテーブルの上いつものように並べられてある筈のものが見当たらず、台所で皿を洗う自分の母親に疑問をぶつける。

「あら、おはよう。ご飯なら、さっきユーちゃんとヒイロ君が食べてったわよ」

こともなげに事実を伝える母。

そしてカインは悲壮な顔を頭に「俺の朝のエネルギーは！？」と紛糾する。

「か母よ、少しは止めてほしかった、という気持ちを込めることも忘れない。」

「バナナあるわよ」

「行ってきます……」

意外にも冷たい母を尻目に仕方無しにバナナを頬張り、店の方へ出るカイン。

うん、今日も元気だバナナがうまい、やっぱり朝はバナナだよね、と自分を慰めながら。

ストリーム家は自宅で商店を経営しており、居住スペースと商店スペースが一体となっている。ちなみに、武器や防具などを売ってい

る武具屋である。

バナナを食べ終えたカインは、店側に出て何かの作業をしている父に声をかける。手にしていたバナナの皮は傍らのゴミ箱に入れておいた。

「父さんおはよ。ちょっと森に行ってくるから、剣持っていい？」

カインの父は作業の手をいったん止めカインに目を向けると、いくつかの剣がささっている傘立てのようものをあごで指し示した。

「・・・じゃあ、その辺のナマクラ、適当に持ってっていいぞ」  
それだけ言つと、またすぐに作業に戻ってしまった。

この街付近は割と平和な方である。

とは言つてもたまに危険なワイルドやモンスターも出るため、街から出る時には何かしらの武器を持って行くことになっている。

ちなみに、ワイルドとは野生動物のこと。

というわけでカインは父に言われた通り、ささっていた適当なショートソード（ナマクラ）を2本手にした。そしてそれをそのまま持っていた鞘に収め、腰に括る。

カインは、剣2本を使って戦う二刀流の使い手だ。

そして純然たる庶民であるストリーム家では、剣は消耗品であり、鞘はリユーズ出来るものなので森に行く時は大体いつもこんな感じだ。

というか、普通の庶民なら殆どこのスタイルだろう。

愛剣、なんてものを手にしている人間はほんの一握りの剣士や戦士ぐらいのものである。

「じゃあ、行ってきます」

「ああ、あとコレ、ユーノちゃんに」

そう言つて、丈夫そうな革のグローブ（拳の部分には痛そうなりベツト付き）をカインに渡す父。

カインが腰にぶら下げているナマクラよりだいぶいいものだ。

「え、なんで？」

カインはそれを受け取りつつ、当然の疑問を口にする。

「修理の返却？」

充分あり得る展開も予想しておく。

「いいから。」

父はそれだけ言うと、カインにグローブを押し付け再び作業に戻ってしまった。

カインはそんな父の背中を見つめ、相変わらずユーノのファンだ。この親父は、と少し伏せ目がちになるばかりだった。

外では案の定、入り口の横で2人が待っていた。カインは寝坊したことを謝ろうと口を開こうとしたが、そういやこいつらに朝食奪われたなということを出し、一瞬躊躇する。

躊躇した結果、「遅れてごめんけど、朝食返せよ。」とそのままの気持ちをぶつけることにした。

「うん、ごちそうさま。」

「美味しかったよ。」

2人はその率直な気持ちにいい笑顔で答える。朝食のお礼と感想も欠かさない。

それに対してカインはもうため息しか出てこない。

「はあ・・・。そういえば気になってただけど、昨日、森に行くなんて話したっけ？ どうしても思い出せないんだけど・・・。」

ため息ついでに、朝起こされてから気になっていたことを聞いてみる。

「したよ。昨日、ユーノと2人で。」

「あゝ、なんだ、やっぱりしてたんだ。でも2人で、ってそれじゃ俺知ってるワケないじゃん。つか、ホントもう朝食返せよ、おまえらーッ！！」

「ヒイ口君、やっぱり怒られちゃったね。しかもちょっとノリツッコミで。」

「だねえ。しかも徐々にツツコミに変わっていくというちょっとした小技まで……」

「ちよつとは謝ってくれよ!」

「まあまあ、いつものことなんだから」

3人の関係性は大体こんなところである。

ヒイロがカインをいじり、ユーノがそれに乗っかり、カインはそれにツツコミを入れる。

ちなみに、ヒイロとカインは同い年で17歳。ユーノは一つ下の16歳だ。

「ようし、3人揃ったところで森にしゅっぱーっ!」

それまでの流れを意に介さず、元気よくユーノが言い放つ。ヒイロもそれに倣う。

「話聞けよ……。ていうか、いつものことってのを嘆いてんだけどな……」

カインはもう強く言うのが疲れたのか、元気な2人に諦めモードでついていくことにした。

「カイン、これ朝食のお礼。きつと美味しいよ!」

「うん、いろいろツツコミたいけど、コレまず毒だから」

「え、そうなの? でも、ヒイロ君が……」

「ヒイロ、怒るぞお前!」

「冗談だってカイン。ほら、こっちは食べれる」

「まったく……」

森の中、3人は朝食を食べていないという可哀想なカインのために食料を探しながら進んでいた。

「もうつえば、みいる?」

口の中で木の実をもごもごしながら話しだすカイン。

「なに?」

当然スルーするヒイロ。

「……………いやさ、森に何しに来たのかと思って」

暫く黙って口の中を空にしたあとに疑問を口にするカイン。もぐもぐごっくん。

「ああ、ちよつと遺跡を調べにね」

「遺跡？ 『渡月廊』のこと？」

ユーノは遺跡とやらに心当たりでもあるのか、とげつろつ、と口に出しヒイロに確認する。

「そう、『渡月廊』」

「へえ、なんでまた急に？ 行っても何もなかったんじゃないかな？ っけ、あそこ？」

カインは記憶を辿る。

自分達の住む街から最も近い遺跡『渡月廊』は、その近さゆえ当然何度も調査し尽くされており、既に誰からも興味を示されなくなつた忘れられた遺跡である。

それ故、この遺跡の眠る森は『忘却の森』なんて呼ばれているくらいだった筈だ。

「いや、何となく」

「何となく？」

ヒイロの意外な理由に首を傾げるユーノ。

「うん、別に目的があるワケじゃないんだ。僕自身、何度もここに来たことあるし。強いて言えば、夕べたまたまこの調査記録読んでたからちよつと気になつたぐらい」

「ふん……あ、そうだ！」

突如何かを思い出したのか声を上げるユーノ。

「どした？」

「いや、たまたまで思い出したんだけど、私もちよつと『渡月廊』に用事があるんだつたよ。たまたま」

カインの問いに、自分にも『渡月廊』に用があると答えるユーノ。

「ユーノこそ珍しいじゃないか、何の用なの？」

「うん。大した用じゃないんだけど、なんか最近『渡月廊』付近に割と大きい鳥のワイルドが出るから、様子見て来いってお父さんに言われてて……」

「へえ、師匠がねえ……」

ユーノの家は道場をやっており、ユーノの父はその師範である。

ヒイロはそこに通っている生徒なので、ヒイロにとってユーノの父は師匠なのだ。

ちなみに、カインも通っている。

「んで、危ないから片づけて来いって」

「片づけるって……」

「危ないな」

「あと、カインとヒイロにもやらせとけて」

「え」

「えっ」

「えっ？」

ユーノの一言に固まる2人。

それを見て何故か固まるユーノ。

「いやいや、聞いてないよ！」

「うん、言ってないもん」

なんとか沈黙を破り突っ込みを入れるも、こともなげに返されるカイン。

「師匠、相変わらずだなあ……」

一方、ヒイロは既に悟ったかのように呟くだけだ。

「別にね、すぐじゃなくてもよかったみたいなんだけど、まあ、今日でいいかなみたい……」

「こ、心の準備が……」

「まあ、今回は師匠にしてはまだいい方じゃない？」

「うぐう、過去のトラウマが……」

ヒイロの慰めで、何かの思い出が蘇ったのか呻きだすカイン。

ユーノの父はこういった課題を突如子供たちに吹っ掛けることで有

名なのだ。

そしてその課題に対し、若干アレ気味のユーノは特に苦でもないらしく、飄々としたヒイロは後頭部に汗をかきつつこなし、カインはいつも嘆いている、といった感じである。

ちなみに、他にも道場生はいるのだが、この3人への課題が最も厳しい。

まあ、それだけ期待されているのかもしれないが、実は気兼ねが要らないからというのが3人の知る由もない師匠の本心。

「と、そんなこと言ってるうちに着いたね」

いつの間にか到着していたのかヒイロが前を促す。

そこは少し森が開けている崖下で、小さな洞窟と簡素な案内板が佇んでいた。

案内板には簡単な説明書きまでされており、ここが如何に調べつくされたかが見てとれる。

というかそもそも、森が開けているのは調査の為に整備されたからであり、ここへ来るのもそれなりに整備された道を歩いてきたのだ。

「ホントだ。やれやれ、急に件の鳥が出てこなくて助かったよ」

「ホントだ。結構大きいね」

「大きい？」

カインが安堵を呟くも、現実是非情である。

ユーノの頓珍漢な感想に振り向くと、そこには高さ2・5mほどの2足歩行の鳥がこちらを睨んでいた。凶暴そうに。

「うわあ、こりやでかいなあ」

「て言うか、今にも襲われそうなんだけど・・・」

感情のない声で感嘆するヒイロと、ビビりまくるカイン。

“ぎよえ〜！！”

件の鳥は、テンション上がってきた！とばかりに威嚇し始め、3人も戦闘態勢に入る。

「あ、そうだ。ユーノこれ！」

剣を構える前に父から預かっていたグローブを思い出したのか、そ

れをユーノに手渡すカイン。

鳥は律義に威嚇し続けて場を繋げてくれているのありがたい。

「え、くれるの？」

「うん、父さんから」

「やったー　ありがと！」

カインからグローブを受け取り、装着するユーノ。

「さてと、じゃあそろそろ捌きますか。」

「え、食べるの？」

「ささみがいいよね」

居合で向かうためか刀の柄に右手を添え調理宣言するヒイロ。

2本の剣を鞘から抜いて構えつつツツコミも忘れないカイン。

自分の好きな部位を語りつつ装着したグローブで拳をぐっばして感触を確かめるユーノ。

下らないやりとりをしながらもそれぞれ鳥に相対する3人。

師匠のお陰か、実は結構闘い慣れていたりするのだ。

“ぐけえ〜っ！！！”

一方鳥は、いい加減痺れを切らしたのか襲いかかってきた。食うなよ！って感じで。

まず、前衛のカインに襲いかかる鳥。

鋭い嘴を眼前に突き立てるが、左剣で払いのけるカイン。そのまま右剣で追撃しようとするが、鳥はそれを察知してかすぐに離れる。

意外と頭が回るようだ。

続いてヒット& amp ;アウェイを得意とするユーノがカインの右横手から走り抜け、鳥の首元目掛けて左足で回し蹴りを放つ。

鳥はその一撃に対し、重心をずらして首の付け根辺りでユーノの足を受け止める。脚がめり込むが感触が弱く手応えが悪い。首の付け根付近は羽毛がふっさふっさのため、ユーノほどのウェイトでは決め手になりかねるのだらう。

しかも、そのまま体当たりでユーノの体勢を崩すというおまけ付き。

「どうしよう！意外とお利口だよ、あのコ！」

本能なのか知性なのか鳥の意外な動きの良さに驚愕しつつ、崩された体勢を後方に転がることで立て直すユーノ。

「じゃあ、コレならどうだ!？」

その後方に控えていたヒイロが抜き身の刀に電流を纏わせて鳥に迫る。じりじりと。

ヒイロは3人の中で最も魔術が得意だ。次いでユーノ、カインという順。

電流を纏った刀を左からの逆袈裟で鳥へと振り抜くヒイロ。その危険性が判るのか、逆袈裟を嘴で受けようともせず慌てて避ける鳥。

しかしヒイロはそれを読んでいたのか、振り抜いた刀をすぐに返し逆胴を放つ。

ガキイ！ と音がしたかと思うと、驚くべきことに鳥は左脚で石を掴み逆胴を受けていた。

そのまま刀身が滑ることがなさそうなのは、摩擦の低そうな砂岩のためだろう。

偶然拾ったかと思いたいなこりゃ、利口すぎでしょ。と傍で見ていたカインは思ったという。

しかしそこはヒイロ、一瞬「うそん!？」という顔をしたが、追撃の手は緩めない。

受けられた逆胴を引き離し、もう一度逆胴、振り抜き左逆袈裟、弾かれ正胴、と連撃を放つ。

鳥も負けじと、連撃を弾きつつ嘴でがん突いてくる。

顔付近でぶんぶん空を切る嘴。避けつつ反撃するヒイロ。

かなりの接近戦のため、ヒイロも必死、鳥も必死で一進一退。

ちなみに、剣術についてもヒイロは3人の中で一番である。

「ちよつと！手伝ってくれよ！」

ヒイロがようやく声を発したのは、進まぬ攻防に痺れを切らしお互い距離をとった時だ。

よく見ると、鳥もヒイロもぜえはあ言っている。

「えー、もうヒイロが頑張ってくれよ・・・」

「いいから！タッチ！」

「うげえ」

選手交代。今度はカインが鳥へと迫る。しびしび。

鳥はその様子を見て、地面を蹴りつけカインの目の前へと礫を舞い上げ当たり散らす。

うわ、とカインが驚いて礫を躲そうとするが、礫を目くらましに鳥が迫る。

飛べない羽根をばたつかせカインへと鉤爪を突き立てようと襲いかかる鳥の巨体。そして眼前に迫る鉤爪。それに驚いたカインは思わず右剣で頭部を庇うが、その右腕が鉤爪に引っ搔かれてしまう。

「ぐあっ！」

“どすうっ！！”

痛みに声を上げるカイン。しかし、引っ搔かれてすぐに鳥の巨体が左へと盛大に吹っ飛ぶ。

ぐけえ、と苦しそうに鳴き声を漏らし地面を転がる鳥を吹き飛ばしたのはユーノのドロップキックであった。鉤爪がカインを襲いそうになったところで既に駆け出していたが、間に合わなかったのだらう。

「カイン、大丈夫？」

「ありがとう、助かった！」

蹴りから見事な着地をキメたユーノがカインへと駆け寄る。

「怪我は？」

「ん、ちよつと掠っただ・・・け？」

倒れこんだ鳥は、しかしやはりユーノのウェイトでは効きが浅いかすぐに立ち上がり、ヒイロの放った電撃を避けていた。

ヒイロはそのまま鳥を牽制しつつ、2人へ近寄る。

「大丈夫？」

「・・・固まった」

「へ？」

鳥からは目を離さず様子を訊くと、カインからは予想外の回答。

思わず変な声が出てしまい、カインへと目を向けるヒイロ。

「って、うわ！」

カインの右腕は確かに固まっていた。灰色に硬化していたのだ。具体的に言えばもの見事に石化していた。それを見たヒイロも思わず驚きの声を上げる。

「ヒイロ、あいつモンスターだこれ・・・」

「うわ、石化初めて見たよ、わたし」

カインは意外にも冷静そうにそう告げ、ユーノも驚きの声を上げる。というか、あまりの事態に2人とも呆然としている感じがたが。

ちなみにワイルドとモンスターの違いは、こういった魔術的なものを使えるか否かで見分けることができる。

「みたいだね、こりゃあ・・・」

ヒイロは相変わらずこちらへ攻撃する機会を窺っている鳥へと目をやる。退化した分厚そうな羽をたまにはたつかせ威嚇したりしている。

「よし、そうと決まれば危ないから一気に片付けようか！」

基本的にワイルドよりモンスターの方が数が少ない。しかし、圧倒的にモンスターの方が危険と言われている。

なぜなら、ワイルドは人の少ない場所に多く生息し、基本的に自身のテリトリーに他者が入って来ない限り自分からは攻撃してこないものなのだ。モンスターも、人の少ない場所で自身のテリトリーを守るという点ではワイルドと同様だが、彼らは突然発生し、凶暴性が段違いに高く、テリトリーそのものも非常に曖昧なため“極めて危険”とされている。

勿論、例外はある（異常に強力なワイルドも稀にいる）ため一概には言えないが、概ね上記の通りであり、それ故モンスターの発生というのは人々の生活にとって死活問題なのだ。

そして、この『忘却の森』には今までこのように強力な鳥モンスターなどいなかったため、新しく発生したのだとヒイロは考えた。新

しい発生はこの鳥を足がかりに発生源を突きとめ食い止めることもできる。そのため、ここでこのモンスターを仕留めることには非常に高い意味が出てきたのだ。

「どうするの？」

「僕が時間稼ぐから、ユーノはカインの石化治してからいつものヒット&アウェイ、カインは石化治ったら炎剣ね。OK？」

ユーノが問いかけ、指示を出すヒイロ。

こういう時に指揮を執るのは決まって最も高い実力を持つヒイロなのだ。

適当に指示を2人に打ち出したヒイロは、一斉攻撃になれば息も自然に合うだろう、付き合いは長いのだ、とも考える。

「了解！ 隊長！」

「判った。じゃ、その間は頼むわ」

ユーノとカインもその指示を汲む。

「全く、相変わらず師匠の課題は無茶苦茶だよ……。」

流石の出来事に不在の師範に対し愚痴を漏らしつつ、ヒイロは刀を構え直した。

正眼の構えである。

ヒイロはこのような時間稼ぎのような局面においては、この攻守ともに繰り出せる、最もスタンダードな構えをとる。

今度はこちらから大きく踏み出す。

右上段から、一見剥き出しに見える首目掛けて一閃。

その一閃を鳥は、ヒイロの右側へと器用にステップし逆にヒイロの右肩口へ目掛け嘴を繰り出そうとする。

しかしフェイク。

ヒイロは踏み出したかに見えた右足を実にスムーズに半歩下がらせ、刀をすぐに返し、逆袈裟に近い斬撃を肩口へと迫る頭の後方、つまりは鳥の首へ目掛け振り上げ……。

そして、拮抗。

動物の本能か否か、鳥は突き出す首を直前で急遽右下へと方向転換してのけた。

“ガキイン!”

鳥の嘴は刀身を銜え込み、ヒイロはその刀身を嘴の奥へと突き込むように渾身の力を込め応戦する。

まさに一進一退の接戦を繰り返すヒイロと鳥であった。

少し離れた場所。ユーノがカインの石化を治している。

ユーノはこういった回復系を得意とする水属性魔術を操ることができ。

「凄いねー、ヒイロ君」

「もう、あいつ一人で片付けてくれると助かるんだけどなあ……」

「」

「んー、でもやっぱり決め手に欠けるんじゃないかな?」

案外暢気なものであった。

「……っと、治ったよ」

「お、ホントだ。ありがとう」

「それじゃあ、加勢に行きますか!」

「だな。3人でかかれれば流石に一気に終わるだろう。」

治療が終わり、立ち上がる2人。いい加減決着をつけるために。

実際、それから決着までは早かった。

カインは火属性魔術を扱うことができ、ヒイロが刀に電流を纏わせたと同様に剣に炎を纏わせつつ加勢に向かう。

そして、先に向かったユーノが鳥の羽毛を引っ掴み投げ飛ばし、ヒイロとの拮抗を崩す。

次に、ヒイロがすぐに体勢を立て直し飛ばされた鳥へと雷撃。ようやくまくともなダメージを与えることに成功する。

続いて、雷撃に立ちくらむ鳥に対し間髪に入らず回り込んでいたカインの炎剣が羽毛を焼き切る。

そう、まさにフルボツコに……。しかし、ここで鳥が悪足掻き。

“ぎえ〜!!”

と断末魔のような鳴き声を高らかに叫ぶ。

「カイン、下がれ!」

“ずどん!”

それが魔術発動の予備動作だと勘付いたのはヒイロのみであった。

そしてそれを鳥に最も近いカインへと叫ぶ、が同時に衝撃。地面が轟く。

「うわ!」

驚いたカインが一旦引く。

しかし結果的にその衝撃は、カインだけでなく3人全員をよろめかせることに成功していた。

そして次の瞬間、そもそも洞窟近くの崖下で闘っていた3人は悪寒を感じ、崖上を見上げる。

鳥の悪足掻きは、幾つもの落石を呼び寄せていた。

どずどすと、大小の落石が3人を襲う。主にヒイロとユーノを。

「ヒイロ君、危ないのこっちじゃん!？」

「ごめん!避けて!!」

ユーノがヒイロに突っ込むという珍しい光景。双方必死に落石を避けつつ。

「あ! カイン、鳥が逃げる!」

そこでユーノがこそこそとこの混乱に乗じて逃げ出そうとしていた鳥に気づき、小さめの落石を避けていたカインへと報せる。

「ホントだ!待て、この!」

「カイン、あと頼む!」

落石を避けつつ慌てて鳥を追うカイン。

避けるので必死なヒイロ(とユーノ)はカインへと託す。ここで逃すのは後々まずいのだ。

鳥も気付かれたのに気付いたのか、後ろを振り向き追ってくるカインを確認すると慌てて羽をばたつかせ“ぎよわ〜!”と敗走する。

だが、実は3人中最も速いのはカインである。落石が一瞬止んだ隙を狙い一気にトップスピード。

敗走する鳥の直前で跳ね上がり、両手の炎剣を振りかぶる。

「こんがりしてやる！チキン野郎！」

ちよつとどうかと思うセリフを放ちつつ、炎の2連撃を敗走の鳥へと振り抜く。

“くぎゃー！！”

そして鳥は本当の断末魔を叫び倒れ、カインは炎が尾を引く剣を鞘へと収めフィニッシュ。

3人の勝利である。

そしてカインは落石に当たった。ごすん。

「にしても、最後のあのセリフはどうかと思うよねー？」

ユーノがカインの頭部を治療しつつ呟く。

「しかも、フィニッシュ決めた後に落石に当たる辺り、もうミラクルとしか・・・」

「いいじゃんか！ 勝ったんだからさあ！」

ヒイロが笑いを堪えながらカインを褒め称えるが、お気に召さなかったようで悲痛な声で反論される。

「いやあ、でも何とか勝てたね」

ユーノが安堵して漏らす。治療も終わったようだ。

「ていうか、最初っから3人でかかれればよかったけどね」

「いやあ、ヒイロと鳥の大接戦が見ものだったよ」

すぐに一斉攻撃しなかったことを後悔するヒイロに対し、カインはここぞとばかりに反撃する。彼らは基本的にとんとんの関係なのだ。

「そういえばあの鳥、新しく発生したんだよね？ なんて種類かな？」

前述したようにモンスターは（何らかの要因があるらしいが）突然発生するのだ。今回の鳥の件に関してもそうであり、ユーノがそのことに対して言及する。

「ああ多分、コカトリスの亜種、じゃないかな？」

心当たりがあるのかヒイロがその疑問に答える。

ヒイロはこういった知識に関しても3人の中で抜きん出ており、他2人が知らないような知識を広く有しているのだ。

更に言えば、剣術・魔術・知識と3人の中で最も優秀なヒイロは、実は稀に見る天才と言われている。

性格は多少アレだが。

「コカトリス？」

コーノはその名を耳にしたことがないのであるう、ヒイロの言葉に鸚鵡返し。

「石化の毒を有する雄鶏の姿をしたモンスターだよ。落石引き起す奴は初めて見たから亜種じゃないかな。」

カインも横で首をひねって頭に？を浮かべていたため、彼らに解説するヒイロ。

「知ってたのか？」

事前に情報があれば対処も違っていた筈では、と言外に尋ねるカイン。

「いや、『チキン野郎！』で思い出した」

「ああ、なるほど・・・」

3人は倒したコカトリスを改めて確認し、確かにどう見ても鶏だなこれは、とうんうん頷く。

コカトリスはぐったりとしている。こんがりと。

今回のメインの目的であった『渡月廊』は崩落していた。

「そりゃあ、まあ、あんな落石があつたあとじゃあねえ・・・」

カインの治療を終えた3人は、すぐに『渡月廊』へと続く洞窟に入ったが、予想通り通路の途中が大小の岩で塞がれており、それを前に立ち尽くしていたのだ。

ヒイロも、コカトリスの魔術の影響であることは確かであろうと漏らす。

「残念だったねえ」

「まあ。元々深い目的があったわけでもないしね。とりあえず、一旦街に戻って然るべきところに報告しようか」

ヒイロがそう言い、通路を引き返そうとする3人。

「あれ？」

ところが、振り返ってすぐ立ち止まるカイン。

「どうしたの？」

「・・・いや、何か聴こえない？」

ユーノの問いにカインがそう答えたので、他2人もその音を聴こうと耳を澄ます。

“サー……か……サー……い……！……サー……”

確かに、小雨のような音と、それに混じって人の声のようなものが聴こえる。

「ホントだ。どこからだろう？」

「声、かな？」

ヒイロとユーノもその音に気付き、周りを見渡す。

「あ！ あそこ！」

カインが先に音源を探していたのか、薄暗い洞窟の中、崩落した通路の右手上方を指差す。

カインが指し示す先へ目を向ける2人。

そこは、積まれた落石によって隠れるようになってはいたが、確かにその先に空間があることを示していた。

「え、あんなところに部屋？！」

「なんか、鉄の棒みたいなのも出てるね」

ヒイロは文献にない部屋の出現に驚き、ユーノは上方の空間から飛び出た金属の一部確認する。

「ヒイロ、新しい部屋なのか？」

「うん、今まであんなところには何もなかったはずだよ」

「もしかして・・・」

「うん、コカトリスの崩落で壁が崩れて出てきたんだろっね」

目を輝かせて推測するヒイロ。彼はこういう知的好奇心をくすぐるものが大好きだ。

心なしか、ユーノとカインもそわそわしている。

「ねえ、行ってみようよ！」

「賛成」

案の上、先へ進むことを提案するユーノ。カインも地味に賛同。

「え〜。でも、こういうのはやっぱり専門の人に任せないと、ねえ・・・？」

渋るヒイロ。勿論、落石を登りながら。

僕は止めたんだよもうしょうがないなー、とかのたまいつつ。半笑いで。

3人で協力して落石を幾つかどかしていくうちに鉄棒の正体が判明する。

どうやら、梯子のようだ。その梯子は上へと伸びている。

それを確認した3人は顔を見合わせ、にやりと笑う。

そして、落石をどかす作業は続く。何故か無言で。みんなニヤニヤしながら。

小雨のような音が近付いている。

3人が梯子を登り終えると、そこには5m四方ほどの大きいとも小さいとも言えない部屋が広がっていた。ところどころ崩れてはいるが、平らな壁に囲まれた人工的な部屋だ。そこかしこに見たこともない、道具ともインテリアともつかない物も転がっている。

「『渡月廊』に似てるけど、ちょっと違うな・・・。」  
部屋を見渡してヒイロが独りごちる。『渡月廊』とは部屋の名前なのだ。

「ねえ？ あれ・・・、人、だよな？」

先ほどよりも小さくなってしまっていたが、雨音（のような音）は

変わらず流れ続けており、カインがその音源らしきものへと指差す。その先には、確かに人がいた。光沢のあるガラスのような板の表面に張り付いた、上半身だけの人がいた。立体感が無い。

3人はその人物を見詰め立ち尽くす。こんな状況は初めてだ。まるで窓から身を乗り出すように二次元の人間が叫んでいるのだから。

「誰か、聴こえないのか!? 聴こえたら、手元のボタンを押しながら応えてくれ! 頼む! 誰か!」

雨音に混じってはいたが、その声は確かにそう何度も繰り返していた。雨音にかき消されそうになりながらも、必死に。何度も。

3人は、あまりの事態にしばし呆然としてしまっていた。

この部屋は何だ? あのガラス板は何だ? あの人は誰だ? どうすればいい? 大混乱である。

しかし、ユーノだけはそうでもないのだろうか、あまり間を空けずにガラス窓へと近づく。

カインとヒイロが止める間もない。彼女は考える前に動くタイプなのだ。特に、誰かが困っていれば躊躇はない。

「聴こえますか?」

「こたえてく……え?」

ボタンの位置は迷わなかった。ガラス板の下部にテーブルのようなものが突き出ておりそこに一際目立つボタンがあったのだ。

そのボタンを押しつつユーノが応えるが、相手も状況が飲み込めていないのか、少し間抜けな反応を返してしまう。

「聴こえますか? あなたは、誰なの?」

男性陣が後方から見守る中、ユーノが再度尋ねる。

「……手元に黒い丸いダイヤルがあると思う。それを右に回すと音が大きくなる筈だ」

窓に映る男は驚愕による長い沈黙ののち、質問には答えず、努めて冷静に答える。

顔は驚愕のままだったが。

「これかな？」

黒いダイヤルを右へと少し回すユーノ。

「回したよ」

「ありがとう。さつきより聴こえやすくなったと思うけど、どうかな？」

「うん、よく聞こえる」

ガラス窓の男が、驚愕の表情は崩さず、それでも口調だけは冷静に、その音質を確かめ、ユーノはその良好を伝える。

雨音、ノイズも同時に大きくはなっていたが、男の声は先ほどよりも明らかに大きな音量となっていた。

「確認するけど、君が今いるそこは、“地上”で間違いはない？」  
白衣の男が“地上”の部分強調して尋ねる。

「うん、ここは地上だよ。海の中でもないし、空中に浮いてもないからね」

ユーノもそれにさらりと返す。

そんなユーノに対し、こいつはなんて大物なんだろう、とカインとヒイロはしきりに感心するばかりだ。

「そうか、良かった。繋がったんだな……」

男はその返答に心底安心したように呟く。

「正確には地中といった方がいいかもですが」

そこで、我を取り戻したヒイロが突然会話に割り込む。そして、一気に捲し立てる。

「ここは『渡月廊』。月に渡ることができる回廊、と呼ばれている科学文明時代の遺跡です。いろいろ聞きたいことはありますが、まずひとつ。あなたは、一体何者なんですか？」

「うわ！ びっくりした！ もう一人いたのか!？」

向こうは音声のみなのだろう。窓、画面上の男はその声に心底驚く。

「ああ、すみません。実際は3人です。もう一人います。」

「そ、そうかい……。そこにいるのは3人か……。それに、」

渡月廊』……。」

驚いた男に弁明するヒイロに対し、何かをぶつぶつ呟きながら考え込む男。

「それで、あなたは一体……？」

「ああ、僕が誰か、だっただけ？ うん、どうやら君は頭が良さそうだから、一気に話させてもらおうよ」

“ピーッ！ピーッ！ピーッ！”

そこまで話したところで、突然甲高い音が鳴り響く。

「……！？」

「気にしないでくれ。ただのバッテリーの警告音だ」

音はすぐに止み、驚いて辺りを見回した3人に対し男がすぐに説明する。

「ばってり？」

しかし、単語にピンと来ないのか首を傾げるユーノ。

「時間切れが近いってことさ。そういうワケだから、すぐに用件を伝えるよ。」

そこからは、男とヒイロの独壇場。質問と応答の応酬だった。

「まず、僕は月の科学者だ。」

「月！？ やっぱり……。」

「理解が早くて助かるよ。」

「月にはやっぱり人がいたんですね？」

「ああ、おそらく君らの言う、科学文明時代の生き残りというやつだ。」

「伝説じゃなかった……」

「というか、正直僕ら月側からしても“地上”のことはよく判っていないから、この通信も繋がるかどうかは本当に賭けだったんだ……」

「この世界において、地上と月の関係というのは概ね二人が話している通りである。」

「……それで、用件というのは……？」

時間が無いというのを考慮してのことだろう。様々な質問疑問を押し留め、ヒイロが尋ねる。

「……ここからは、非常に深刻な話になる」

少し間を溜めて切り出す男。

「……判りました。お願いします」

ヒイロも息を呑み応える。

「率直に言おう。もうすぐ僕たち月の文明が、君らのいる地上へと侵略戦争を仕掛ける」

「……は？」

「そして恐らく、このままだと地上は負ける。確実に」

「ええええええええええっ！！！！؟؟？」

衝撃の事実には驚愕する男2人。ユーノだけは判っているのかいないのか表情は変わらない。

男は続ける。

「つまり僕が通信を試みたのは、この事実を君たち地上の人々へと伝えるためだ」

「……え、え、ちよつ、ちよつと待って下さい！　そ、そんな

無茶苦茶な！　戦争！？」

「……ウソだろ？」

のちに、らしくなかつたなと後悔するほど動転し、思わずどもってしまふヒイロ。

呆然とするカイン。

「信じられないのは判る。でも、信じて貰えなければ君達は何もできずに侵略されてしまふ！　だから信じてくれ。これは、事実なんだ」

真剣に残酷に、宣言する男。

「……わ、判りました……。ああ、でも、ちよつと待って下さい……。今、ちよつと、考えますから……」

ヒイロは動転しながらも、何とか冷静を取り戻そうとする。そして、時間を置き考えを纏める。

ちなみに、他2人はまだ呆然としている。

「つまり……、今ここにいる僕らはもしかして……?」

「多分君の考えている通りだ。このことを伝えてほしい。というか、伝える必要がある。」

「ですよー」

予想通りの重責に、何故か棒読みになるヒイロ。

「出来れば、君たちの国のトップの者に!」

「で、ですよー……」

畳み掛ける重責。さしものヒイロも少し気弱になり、自身の理解の早さを嘆く。なんて荷が重い! と叫びそうになる。

「いいよ、やるう」

ユーノが前に出る。

「え、ユーノ?」

「だって、これはもう、やるしかないじゃん。ねえ?」

動揺するヒイロに、当然でしょ? と言わんばかりに応えるユーノ。

「済まないが、頼む!」

頭を下げる男。彼も必死なのだろう。

「……カインはどう思う?」

「えっ、俺!? 何で急に!?!」

突然カインへと話を振るヒイロ。それに驚くカイン。ていうか俺、さっきまで空気だったのになぜ!? とも嘆いておく。

「……いや、正直ヤダよ。なんで俺たちみたいな一般市民がそんな重責を、ってそりゃ思うさ……」

そこで一息つくカイン。

「けど、ユーノが言ってるように、ヒイロが考えてるように。選択肢は、どうせ一つなんだろう?」

また少し間をおき、続ける。

「だったらもう、自分ばっか振り回されるのも癪だし、やるよ! やってやるよ!」

最後は半泣きで、科学者の依頼を請け負うカインだった。

こうして彼ら3人は、巻き込まれることになる。  
まだ始まってもない、戦争に・・・。

001 : 森での一件(後書き)

ひとまず第一話です。

誤字とか脱字とか、面白いとか面白くないとか、文章おかしいとか作者おかしいとかあったらおせーてください。

《第2話》

翌日、準備を終えた3人はカイン宅前に集合していた。

ちなみに、昨日の月との通信は科学者からもう一つの依頼を聞いたところでタイミングよく切れてしまった。おそらく彼が言っていたバッテリー切れなのだろう。その後いくら操作しても通信が再開することはなかった。

更に、その通信の内容は結局、大人たちへと伝えられることはなかった。

今話したとしても信じてもらえないだろうし、信じてもらえたとしても混乱を招くだけだろう、というヒイロの判断によるものだ。但し、モンスターの出現と遺跡の崩落の件については、きちんと役所へと届け出ておいた。少し職員に事情を聞かれたが、あとは恐らく役所側で然るべき処置がされるだろう。

「にしても、師匠は相変わらずいい加減だなあ・・・」  
カインが愚痴るように呟く。

「まあでも、おかげでこうして普通に出発できるじゃないか」

「まあ、そうなんだけど・・・」

実は、昨日の出来事を包み隠さず全て話した大人が一人。他ならぬカインたちの師匠、つまりはユーノの父である。彼には全てを報告したのだ。

ヒイロも最初は躊躇したが、結局ユーノが淀みなく父へと全てを話したのだ。

月との通信内容を聞いた師匠は流石に面食らったのか、そいつあー大事だ！ と驚きを隠せなかったようだ。しかしすぐに、じゃあ行

つてこいお前ら、と間髪入れずに指令を出すあたり、ホントに流石としか言いようがないだろう。で、出発の朝である。

ちなみに、カインの両親とヒイロの母へはユーノの父が事情を大まかに説明した。

修行の一環として大事な用事を言付けた、とのこと。嘘ではない。

「さてと、じゃあまずは帝都だね！」

ユーノが元気よく確認する。

この国は帝国である。そして帝国の首都である帝都は、この街から歩いて1日半程の場所にある。

昨日の科学者からの依頼により、3人はまず帝都へと赴き、この国の首脳である“剣帝”と呼ばれる男に会わなければならないのだ。

「そうだね。まあ、そこまで急を要するほどでもないみたいだけど、少し急ぎ目で行こうか」

ヒイロが続ける。

それは昨日の科学者が言っていたことだ。簡単に言えば、すぐに戦争が始まるわけじゃないけど出来るだけ急いでくれ、とのこと。帝都へ歩いて行くぐらいの余裕はあるのだ。

「なあ、それはいいんだけど、着いてからはどうするんだ？」

カインが不安を口にする。

「すぐに剣帝さまに会いに行くけど？」

ユーノが当然でしょ？ といった顔で答える。

「いやいや、そんな簡単に会えるモンじゃないでしょ。剣帝様って」

「大丈夫だって、なんとかなるから！」

「そうそう、その辺は大丈夫だから」

カインの尤もな意見に対し、ユーノとヒイロは随分楽観的に答える。

「そういうもんなのか・・・？」

冷や汗を流しつつ、呟くカイン。

そして一路帝都へと旅立つ3人。重要な使命を背負いつつ。割と呑気に。

《閑話休題》

帝都へと向かう道中。

「ところで、トキコさんは何て言ってたんだ？ この件についてはカインがヒイロへと尋ねる。トキコさんとは、ヒイロの母だ。」

「ああ、えーと確か、帝都には変態とかいるから、って言ってた」「いるから何なのさ……。」

ヒイロの母は自称占い師である。しかもよく当たる。そして、たまにヒイロやカインたちにこういう意味ありげなことを言ってくるのだ。

だが、息子たちへは何のつもりか、だいたい先程のような抽象的だが具体的だかよく判らない言葉で伝えてくる。含み笑いで。きつと楽しいのだろう。

「うん、僕も判らない……。」

さしものヒイロも自身の母のことは理解しきれないようだ。ちなみに、頭も上がらない。

「相変わらず得体の知れない人だなー」

「ねえ、その変態さんってどんな種類なのかな？」

ユ一ノが首を傾げて疑問を口にする。

「ああ、それはね……。」

「珍しい動物とかじゃないから！ そして普通に説明しようとするな！」

「母が言うには、なんかドSらしいよ。しかも美人」

「流すなあツ！ つてなんだそりゃ！？」

「さあ？ でも、美人ならどんと来いだよネツ」

「ネツ　じゃねえよ」

「やったね！」

「ユーノも適当に返事すんな！　そして、小さくガッツポーズ作るな！」

「じゃあ、カインは後ろを頼むよ！」

「私は前だね！」

「何をだよ！？」

「ナニだよ」

「うるせえ！　斬るぞ！」

「カインがいじめるー」

「よしよし。じゃあ、お兄ちゃんがあっちの草むらで慰めてあげよう」

「変態だー！」

「・・・もうやだこのメンバー」

カインは苦勞が耐えない。

その後、なんやかんやと呑気な急ぎ足で帝都に到着した3人。

帝都は別名“杜の都”とも呼ばれる森林都市だ。

その名の通り、ひとつの森と一体化した街である。

街は大きな城壁に囲まれており、その東西南北にそれぞれ4つの門（本当は大小合わせてもつとあるが殆ど閉門している）が配置してある。

南から来た3人はそのまま南門を通り抜けようと、門兵へと許可をもらいに行くところだ。

「3人です」

ヒイロが筋骨隆々とした門兵へと伝える。

「名前と出身地を記入して、武器を所持してるのなら許可証も提示してください。」

門兵が記入用紙を差し出す。

3人はそれぞれ記入し、武器の携帯許可証を提示する。

「はい、ではどうぞ」

立派な城塞都市とは言え、平和な現代であればこれだけである。

昔はもつと厳しかったらしいのだが、現在は出入も多いためこの程度なのだろう。

城門を潜り、都市内へと足を踏み入れる3人。

先述した通り、この街は“杜の都”である。

しかも、生半可な森ではない。温帯の密林と行っても過言ではないほど緑の密度が高いのだ。

鬱蒼と生い茂った巨木や蔦が街中を跋扈し鎮座し、空は巨大な広葉樹の葉に、地面は芝生や苔によって、上下左右前後360度全てを緑色に染め上げられた筋金入りの“杜の都”なのだ。

しかも面白いことに（とは言え当然のだが）この街は帝都なだけあって非常に人口が多く、それゆえ、門を通り抜けてすぐに見えるのは生い茂る森、でも聞こえてくるのは城門前の市場の喧騒というミスマッチである。

そこかしこを木と草と葉に囲まれながらも、人々の文明が違和感なく溶け込み繁栄していると言う、世にも奇妙な光景がここ帝都には広がっているのだ。

とは言え、曲がりなりにも自身の所属する国の首都であるため、3人ともこの街へは過去に何度も足を踏み入れている。そのため足並みは慣れたものである。

生鮮の客引きや美味そうな屋台、様々な雑貨やアクセサリなどの

露天を横目にすすいと市場の人ごみを抜け街の中心部へと向かう3人。一応先を急ぐ事態なので、こんなところで時間を取られるわけにはいかないのだ。

市場を超えた先には広場があり、そしてその広場の奥に3人の目指す“剣の城”がある。

そしてそのまま、“剣の城”へと普通に入っていく3人。と言うか特に門があるわけでもないの、入るまでもなく直進すれば城内である。

さて、この“剣の城”だが、実はとてつもなくデカイ。

面積だけでもこの街の5分の1近くを占める上に、かなり高い。ただ高いだけでなく、階層構造になっているため、下層部の面積は各層ごとにとんでもない広さになるのだ。

しかしてその正体は、超弩級の巨木群である。

どれくらいデカいかというと、デカすぎてどこまでが根に当たるのか、どこからが茎なのか、それとも枝なのか、そんなことさえ判然としないぐらいの規格外の大きさである。

そしてこの城は、その大きさ広さのため、普通に居住域としても利用されている。

なので、城外と城内の区別というとなんだかよく判らない根っこだか茎だかの隙間を抜けたあたりという実に曖昧なものとなっている。しかも、樹木外の枝だか茎だかの部分もしっかり利用されているという曖昧さ。

そもそも、城に関わりのない庶民にとつても自由に行き来出来る場所のため、城の内外の区別などあってないようなものなのだ。

城内下層部を進む3人。

剣の城内部はそもそも樹木そのものなので基本的にあまり広くない。例えるなら坑道のような広さであり、樹木の茶色とその雰囲気を実際立たせている。

ただ、ところどころに絡まり合った葦同士の間隙があり、採光や通風は悪くない。

3人が目指しているのは上層部であるため、幾つかの階段を上り一度外部へと出る3人。

上層部へは一度外へ出ないと行けない仕組みになっているのだ。

防犯上の理由らしいが、実は内部にも上層部への通路はあるらしい。あるらしいと言うのは、そもそもこの剣の城の全貌を把握しているものがごく一部、国務上の重要人物のみだからである。

剣の城は、入ってからが長い、実は非常に攻められづらい城なのだ。

剣の城外部へと出た3人。

外もやはりぐるりと緑に覆われており、内部を登ってから外へと出たため当然ちよつとした高さなのだが、絡まり合った枝と枝とを繋ぐ形で足場が敷設され安全になっている。

内部が複雑なら外部もかなり複雑なのがこの城。

様々な方向に伸びた枝とそこに設置された幾つもの足場や建物がそれを示している。

3人はもう一度内部上層へと入るため、とにかく上へと向かう。幾つかの階段を登り終えると、ようやく門らしきものが視界に入ってくる。

門の前はちよつとした広場ほどの大きさになっているが、門そのものはそれほど大きなものではない。

公務に携わる者が全く出入しないわけではないだろうが、そういった時間なのだろう。

門前には殆ど人が居らず、2人の衛兵が門の左右に佇んでいるだけであつた。

門前広場へと出た3人。

「じゃあ行くこうか」

「うん」

ヒイロが2人を促し、それに元気よく答えるユーノ。

「えっ、ちよちよっ、ちよっと待ってよ!？」

何が不満なのか、門へと向かおうとしていた2人を慌てて引き止めるカイン。

「どうしたのさ？」

「ほら早く行かなきゃ？」

そんなカインの行動に疑問符を浮かべながら問う2人。

「いやいや、入れないでしょ?! 僕ら一般人だよな?!」

思わず普段使わないような一人称で訴えてしまうカイン。

「ああ、それならユーノが何とかしてくれるよ」

「うん、大丈夫。ほら行こう!」

そう言っただけで門兵の元に駆け出してしまふユーノ。

「えっ? あ! ちよっと待って!」

カインも慌ててそのあとを追う。

右のやたらと横幅の広い門兵の元へと急ぎ足で駆け寄るユーノ。その手には、いつの間に取り出したのか手紙の様なものが握られていた。

「こんにちは。お仕事ご苦労様です」

ユーノ必殺の眩しい笑顔を振り撒きながら門兵へと話しかけるユーノ。

そんなユーノに対し、すわ告白フラグか!? と門兵が少し期待したというのには致し方のないことだろう。手紙持つてるし。

「早速なんですけど、これを団長さんに渡してもらえますか？」

しかし残念。門兵の淡い期待は即刻断ち切られる。そして同時に抱く疑念。

「あああ、あんなおっさんなんかより、おお、俺の方が・・・」

「違います。そういう手紙じゃありません。団長さんに急用がありまして、この手紙を読んで頂ければ判るようになっていきますので、渡してもらえますか？」

ゆっくりと追いついたヒイロが、なにやら盛大に勘違いした門兵に

対し冷静にツツコミを入れつつ、ユーノの言葉に補足する。

ちなみに、カインはすぐに追いついてユーノの隣で一部始終を見ていたが、門兵の視界には入っていないかった。

「なな、なんだ違うのか……。じゃあ、ちょちょ、ちょっと待って下さい」

門兵は安心したやら残念やらといった顔でそう告げると、門の近くにある小さな建物に入って行く。おそらく詰所なのだろう。

「あの手紙、何なの？ 団長さんと知り合いなの？」

一人状況が飲み込めず置いてけぼりだったカインがユーノに尋ねる。

「んー、私は会った事ないんだけどねー」

暫く先程の門兵が出てくるのをボーツと待つ3人。

門の左にいる門兵もさつきからずっとボーツとしている。

この城の警備大丈夫なのかな？ とヒイロがあらぬ心配をしていると、詰所の方からガタガタガタツ！ ズン！ バタツ！ と何やら慌ただしい音が聞こえてきた。

「どの娘だ！」

先程の音に3人が目を向けていると、そう叫びつつ詰所から先程の門兵とは別の人物が飛び出してきた。ベテランっぽいが少しくたびれた感じの門兵である。

「ほほほ、ほらあの真んなか」

「ああ、あの娘か」

「ね？ かか、カワイイでしょう？」

「どうでもいいわい。たぶん奥さんに似たんだらうな」

遅れて出てきた先程の恰幅ある門兵とそんな遣り取りをしながら近づいてくるベテラン門兵。

「あー、君がユーノ君かね？」

「はい。はじめまして、ユーノ・ブルックスです。父がお世話になっておりました。」

ユーノがおっさん門兵に自己紹介する。

「ぐぶぐぶ、かわいい」

「お前ちょっと黙ってる。ふむ。あの手紙は読ませてもらったよ。着いてきなさい。案内しよう」

剣の城上層部。 国務関係者しか入れないような場所をユーノとヒイロとカインは歩いて行く。

先頭にはさっきの草臥れたおっさんみたいなベテラン兵である。

「おい、ユーノ。さっきの手紙は何だったんだ？ この人、師匠の知り合いなのか？」

カインが先程の遣り取り取りでの疑問を口にする。ユーノの「父がお世話に……」というくだりが気になったのだろう。

「うん、そうみたい。私も会うのは初めてなんだけどね」

「なんか、師匠の昔の同僚らしいよ？ 手紙の内容までは開けないようにって言われてたから僕らも知らないけど」

ユーノの肯定にヒイロが付け加える。2人は当然このことを知っていたが、いつもの如くカインには黙っていたのである。

「まあ、昔の同僚と言えばそうだな……」  
先頭のおっさんが苦笑混じりに呟く。

「私の名はミドルスだ。君らは、リユークの所の門下生らしいな？」  
おっさんがユーノらに尋ねる。ちなみにリユークというのは、ユーノの父の名前である。

「ええ、そうです。すみませんでした。急に押しかけてしまったよ  
うで……」

「君らは手紙の中身は読んでないと言ってたな？」

「はい、そうですか？」

「いや、読んでないのならいいんだ……」

ヒイロがおっさんの質問に応える。だがその後の、あんな手紙急に

出してくるなよな全く……、というおっさんの独り言はどつやら聞こえなかつたらしい。

幾つかの廊下と扉を超え、幾つかの階段を上ると大きな扉の前に辿り着いた。どうやら剣帝とその臣下たちの執務室らしい。

実は来る途中、何人か国務関係者らしき人とすれ違いちょっと不審な目で見られたが、軽く会釈して何食わぬ顔で通り過ぎた。おっさんの助言でもある。ヒイロはちょっとセキュリティがどうかと思っただが気にしないことにした。

「じゃあ、ちよつと話してくるから、君らはここで待っているように」

そう3人に告げるとおっさんは扉の中へと入っていった。

残された3人は未知の国務ゾーンを見渡す。

「こんな風になってるんだねー」

「城の割には警備が……」

「食堂つてあるのかな？」

などとそれぞれに感想を漏らす。

この剣の城上層部、いわゆる国務ゾーンは下層部とは構造が少し違ってくる。具体的には、木の本体は単なる支えと化しており、人工物が多くなっているのだ。

もちろん、耐荷重の問題により石や金属の構造物ではなく木造のものが殆どで、廊下もフローリングに絨毯が敷き詰められているらしく、壁はログハウスのそれに近い。目の前の扉とその周囲はさすがに金属製ではあったが。

ちなみにその間、その扉の向こうでは何やらおっさんが頑張っていたのだが、3人には知る由もない。

雑談しながら待っていると、そう時間を置かずにおっさんが扉から出てくる。

「よし、入っていいらしい」

「失礼しまーす……」  
なんか場違いな気がして緊張した面持ちで入室する3人。その言葉もあながち的外れでもない気はする。

内部には幾つかの（それほど多くはない）丈夫そうな木製の机が並べられており、その殆どは空席となっていた。おそらく臣下たちの執務机なのであろう。

「それが貴方の言っていたお客ですか？」

唯一在席していた初老の男性が立ち上がりながらおっさんへと尋ねる。

語調が少しキツく、彼を咎めているようだ。

「まあ、そう目くじら立てなさんなよ？ アイツよりはマシじゃないかい、な？」

「まったく……、今回だけですよ」

どうやら結構な無理を言っ通してもらったらしい。妙にフランクにおっさんが初老の男性へと釈明し、初老の男性も渋々といった感じで許可したようだ。

「すみません、無理言っみたいで……。あの、コール執政官ですよね？」

ヒイ口が3人を代表して、コール執政官と呼ばれた初老の男へと恐縮しつつ謝罪する。

「ええ、そうです。まあ、貴方たちには罪はありませんのでいいですよ。但し、今回のようなことは特例ですので、それを肝に銘じておいてください。問題はこの手紙なので……」

そう言っコール氏は苦々しげに手元に置かれた手紙を睨む。

「師匠、いったい何を書いたんだ……？ ていうか、師匠、何者……？」

そう一人ごちるカイン。手紙の内容は未だにカインらには不明のままだが、彼ら一般人をここまで導くだけの効力があるようで、リュウクについての謎は膨らむばかりである。

「それで、剣帝様は・・・？」

「ああ、陛下なら今は執務中なので、向こうの部屋にいますよ。貴方がユーノさんですね？」

ユーノが尋ね、コール氏が応えつつ訊き返す。

「どうやら件の剣帝は彼らが入ってきたのは別の、もう一つの扉の向こうにいるようだ。」

「はい、父がお世話になっておりました」

「えっ？ コール執政官とも知り合いなの師匠?!」

そしてユーノとコール氏の遣り取りに思わず驚きの声を上げるヒイロ。彼らの師匠の謎は膨らむばかりである。

「・・・ふむ、貴女はどうやら奥方似でいらっしやるようですね。安心しました」

ユーノの応対に満足したようにそう漏らすコール氏。「いや、そうでもないでしょう・・・。」というツツコミがすぐにカインとヒイロの心中に浮かんでは消えたということは、コール氏は知る由もないが。

“コンコンツ、コンコンツ”

「いいぞー」

「陛下、失礼します」

然るべきノックの後くぐもった返事が聞こえコール氏が先入室する。

「・・・えー、陛下に謁見されたいという方が来ております。お通しますがよろしいですか？ よろしいですね？」

妙な沈黙の後に陛下こと剣帝へと許可を伺うコール氏。なぜか後半キレ気味で。ドアは半開きのままなので中までは見えないが。

「あー、今ちよつと忙しいんだが・・・。どうした、フェリウス？

怒ってるのか？」

「陛下、執務は？」

「あー、ちよつとな。気分転換に」

コール氏と剣帝の遣り取り取りが半開きの扉越しに聞こえる。フェリウスというのはコール氏のファーストネームだろうか。フェリウスちよつとご立腹。

「もういいですから、通しますよ。こんな手紙も来ていますし・・・」

件の手紙を渡し、扉を開くコール氏。

「失礼しまーす・・・」

またもちよつと緊張の面持ちで入室する3人。

「げえッ！ リュークからかよ！」

そこには、手紙の内容に対し驚愕と辟易を顔に浮かべた剣帝がいた。何故か汗にまみれ、タオルを肩にかけた姿で。しかも一国の皇帝らしからぬラフさで。具体的に言えば、体にフィットした黒いシャツに動き易そうなカーゴっぽいパンツ、そしてそれがインされたブーツというもの。

「そのリュークの娘さんがこちらの方ですよ」

「うお！ リュークの娘か!？」

フェリウスがユーノを紹介すると、どう見ても運動していたとは思えない剣帝が驚きの表情を濃くしつつ彼女に視線を移す。

「はい、ユーノ・ブルックスです。父がお世話に・・・」

「おお、よくできた娘さんだな！ あいつがオヤジとは思えねえぜ！ ハッハッハ！」

ユーノの慣れない挨拶も途中に豪快に笑う剣帝。そして例の如く「いや、だからそんなことは・・・」というツツコミをぐつと抑える後ろの2人。

「はぁ・・・。すみませんね皆さん。・・・ところで相談なんです。が、剣帝様ともあるう方がこんな、やたらフランクで汗臭いおっさんだということはどうか内密に・・・」

「うおい！ 何気にヒドいなフェリウス！ ていうか、どうせリュークの娘だったらそれぐらい知ってるだろ!？」

「はい、お噂はかねがね。父からは『あのパワー馬鹿』と・・・」

「ちくしょう、リユーク！ アイツ今度会ったら叩つ斬つてやる！」  
「なんか、ホントに悪いな……。ていうか、君らも大変だな……？」

ミドルスの含蓄ある慰めが、置いてけぼりの少年2人の心に、少しだけ響いた気がした。

この帝国は新しい国である。建国して20年程度しか経っていない、新築と言っても差し支えないほどのものだ。ではその20年以上前は何だったのかというと、それまでこの国は、王国と呼ばれるものであった。

その王国には当時、悪逆王（そのまんまだが）という悪逆非道の国王が在位しており、その名に相応しい恐怖政治によって民衆や周辺の小国などを牛耳っていたのだ。

しかしてその暴虐の王は20年前、当時25歳という若さだった現皇帝であるアレックスと彼の仲間たちによって打ち倒され、今の帝国が建国されたというわけである。

このクーデターは後に『七日間革命』だとか『七日間戦争』という名で呼ばれるのだが、所謂クーデターであったにもかかわらず、民衆から当然のように受け入れられた。

ちなみに『七日間革命』というのは、比喻でもなんでもなく本当にほぼ7日間で勃発、終結したからである。

さて、その『七日間革命』の革命軍には、アレックスはもちろん、アレックスの妻であるリアン皇后、コール執政官と何故かまだここにいるおっさんなんかの名を連ねており、そして……

「そしてここにいるユーノさんのご両親、つまりリユーク・ブルツ

クスおよびティナ・ブルックス女史も主要なメンバーの一員だったのですよ。革命軍のね」

「ええええええッ!?!」

「えへへっ」

説明を終えたコール執政官の言葉に驚愕するカインとヒイロ、そして恐らくこのことについては知っていたのだろう、なんか照れてるユーノであった。

「只者じゃないなどは前から思っではいたけど、まさかそんな過去があったなんて……。ていうか、ティナさんまでも……」

「知らなかった! 知らなかったよ! まさかこんな身近に超有名人がいたなんて!」

カインは妙に得心しつつも、普段飄々としているヒイロですらも、各々動揺を頭に狼狽えるばかりである。

ちなみにヒイロは、リユークが何がしか國務関係者と通じているのだろうなということまではユーノとの話の中で判っではいたのだが、まさかリユーク本人がそんな有名人だとまでは想像していなかった。なのでその驚きも仕方がないものである。

「まあ、この事を知っているは一部の関係者だけですからね。知らなかったのも無理はありません。ユーノさんのご両親については、特に本人たちが希望したこともあって公表していませんよ」

狼狽える野郎2人にちよつとフォローを入れるコール執政官。

「なんかね、お父さんは特に剣帝様と仲が良かったんだって。喧嘩仲間なんだってお母さんが言っただ」

「喧嘩仲間ねえ……。まあそうっっちゃそうかもな。仲なんか良かったが」

「「喧嘩!?!」」

そして追い打ちをかけるユーノと剣帝アレックス。

「け、喧嘩って……。おい、ユーノ、剣帝様だぞ?」

「そっだよ、この帝国最強と言われている剣士さまなんだよ……。?」

「それぐらい知ってるよー！」

2人の驚きは無理もない。

皇帝アレックスの愛称である《剣帝》というのは、愛称ではあるが実力の伴ったものだ。

この一見汗臭いフランクなヒゲおやじは、一国を統べる者でありながら、20年以上無敗を誇る超一級の剣士なのだ。

というか本来、アレックス自身は政治が苦手なため実務は殆どフェリウス頼みであるところが大きい。それ故、さつきも執務をサボって筋トレしていたところを見咎められたのだ。

「ってことは、師匠、実は凄く強い!？」

「うん、たぶんねー」

「むしろ、師匠の強さの謎が少し解けた気がするよ僕は……。」  
そして、そんな帝国最強の剣士であるアレックスと喧嘩をしていたというリユークである。

自然とその強さの評価も跳ね上がるというものだ。  
事実リユークの強さは常人を遙かに越えるもので、20年前の革命軍在籍当時には《武神》などと呼ばれ恐れられていたほどである。  
しかし、カインらはまだその片鱗しか見たことがないのである。う。  
平和な現代においては致し方ないかもしれないが。

「さあ、時間が勿体ないですよ。積もる話もあるでしょうが、あなた方の今回の用件を聞かせてもらいますか？」

話がゴチャゴチャしだしたところでコール執政官が場を纏める。さすが執政官だけはある。

その言葉に顔を見合わせる3人。国防に関わる重大な情報のため、流石に言い出しづらいのだろう。ユーノはちよつと何考えてるか難しいところだけど……。

「えー、実はですね……」

どうやらアイコンタクト会議は決着、一番“画面の男”と話していたヒイロが進み出る。まあ、順当ではあるだろう。

ヒイロの判り易く詳らかな説明が終わると、場は静まり返っていた。当然であろう。“月の文明”という未知の勢力の発見というだけでも重大なことだというのに、その未知の文明が自身らに牙を向くというのだから。その衝撃たるや、この場にいる者の言葉を奪うことなど容易いものである。

「剣帝様、信じてもらえますか？」

口火を切ったのは暫く黙っていたユーノである。彼女のこういった場面における肝の据わり様は、驚嘆に価するものだ。そしてその問いかけも、おそらくこの話の最も重要な部分であろう。

何はともあれ、信じてもらわなければ始まらないのだから。

だが既に通信機は沈黙。“画面の男”と話した者もここにいる少年少女たちのみであるからして、その証明は不可能である。もちろん、ヒイロもそのことは先程の話をする上で伝えている。

「いいだろう、信じよう」

「陛下、しかし！」

ユーノの言葉に数拍だけ置き即答するアレックス。それに対し、間髪入れずフェリウスが制止の声を上げる。

「判っているさフェリウス。こんな荒唐無稽な話、信じようっていうのが無理だろうな。だが、他ならぬかつての同志の秘蔵っ子どもの話だ。信じてやろうじゃあないか。だいたい、わざわざ帝都くんだりまで足を運んで嘘を騙る理由もなかるう」

「ですが、証明は不可能です。証明できない限り、そんなあやふやな情報に我々が振り回されるわけには行きません」

少年らの話を信じようと言うアレックスの言葉には、暖かいようなそれでいて鋼のような力強さが感じられた。彼が一国の皇帝である

所以は、こういった場面におけるある種のカリスマのようなもので説明が付くものなのかもしれないな、とヒイロは思わず少し場違いなことを考えてしまう。

そしてフェリウスの主張も尤もでもある。国防に携わる者として、未だ被害者の存在しない、ましてや加害者の存在すら証明し得ないような訴えのために、時間と労力を割くわけにいかないのは当然である。

「……証明は、出来ないこともないんです……」  
そのため、ヒイロはおずおずと切り出す。「画面の男」からのもう一つの依頼を。

「彼は最後に僕らに重要なことを伝えました。彼自身もこの情報の不確かさには自覚があったのでしよう。『ある装置を用いてそちら（地上）へ向かおうと思っっている。手段の委細は省くけれど、地上にある円環状の列島群の一つ、そこに恐らくまだ残っている筈の、ある遺跡へと。出来ればそこで僕を迎えてほしい』と彼は言っていました」

「……期日の指定は？」

“画面の男”の伝言を一字一句違わず紡ぎ出すヒイロの説明に対し、フェリウスが尋ねる。

「今から約20日後です」

正確には“画面の男”は「君ら（地上）にとっての3週間後に」と言っていたのだが、自分たちの帝都までの旅程は省いて返答しておく。

「環状列島の遺跡ですか……。そこまでの旅程でしたら間に合わないこともないですね……。ヒイロさん、待ち合わせしているその遺跡について、もっと詳しくは判りませんか？」

フェリウスは頭の中でここ（帝都）からそこまでの旅程を計算しながら考える。

環状列島には幾つかの遺跡が現存しているため、その絞り込みが必要になってくるだろうと。

「恐らくですが《渡月廊》との類似点が指摘されている《最果て》という遺跡で間違いないかと」

「・・・根拠は？」

「幾つかありますが、殆ど僕の類推と捉えてもらって結構です」

「ふむ・・・」

先の質問の真意としては、“画面の男”からもつと情報は聞き出せなかったか？ というものだったため、ヒイロの返答に対し内心少し驚きながらも確認を取るフェリウス。

《渡月廊》の時もそうだったように、ヒイロの歴史や遺跡などに関する知識は非常に深いのだ。

「フェリウス」

ヒイロの類推に対し更に少し考え込むフェリウスに対し、剣帝が呼びかける。

「・・・判りました。・・・では、この件に関して私と陛下で少しの間協議しようと思いますので、皆さんはあちらでお待ち下さい」  
先の一言で剣帝の意図を汲み取ったのだろう。フェリウスが若者たち  
ちに退室を請う。

かくして少年たちの重大任務は、ここで一応の区切りを果たしたのであった。

002 : 帝都にて（後書き）

2話目投稿！。

しかし男臭い執務室だな。

フランクなおっさんばっかだし。

誤字脱字、感想指摘なんかもよろしくです。

## 《第3話》

劍帝への報告からおよそ12時間後の深夜。  
ヒイロ、ユーノ、カイン及びあともう一人の計4人は、とある屋敷の近くの茂みに潜みその屋敷の様子を窺っていた。

結論を言えば、あの報告の後、彼らの重大任務は晴れて続行と相成った。

ちなみにこの結果は、劍帝アレックスのゴリ押しと執政官フェリウスの譲歩、という名の相談の末導かれたものである。

その証拠に、現在の状況はゴリ押しと譲歩の入り交じった随分と無理のあるものとなっている。

劍帝との相談を終え、3人へと今後の方針を伝えたフェリウス曰く、まず、ヒイロとカイン及びユーノの3人は、自分らの情報を証明する必要があるので、《最果て》の遺跡へと赴くのはその（あやふやな）情報を提供した本人たちが適任である、とのこと。

但し温情として、そこまでへの路銀や移動手段に関しては政府側に負担が可能である旨も伝えられた。

次に、その情報の正誤確認のために政府側から証人（3人に同行する者）を用意する、とのこと。

そしてその人物には、陸軍特殊部隊所属の一人の兵士が選ばれた。それが冒頭にてヒイロたちと共に行動している“もう一人”である。最後に、その兵士には現在遂行中の任務があるため、その任務が終わり次第でないと出発できない、とのこと。

但し、その任務に対し個人的に協力し、出発を早めることは可能だし好きにすればいい、とも。

恐らくこの最後の部分には多分にアレックスのゴリ押しが含まれているのだろう。

自分たちを試すような、故郷にいるはずのリュークの無茶振りを彷彿とさせるような、そんなニュアンスが含まれているように感じられた。

だから、「ああ、同類かこいつら・・・」とカインとヒイロが心中で溜め息を漏らしたのも無理からぬ事であろう。

もちろんカインは、その決定に対し多少の異を唱えた。「そこまでする必要ないだろ!? まだやんの!？」と言った感じに。

だがその意見は当然の如く「やるに決まってんじゃない?」と不思議そうな顔で首を傾げるユーノと、「確かにそれは余りにも無茶苦茶かも。でもしょうがないよね、剣帝様のご提案だしね。遺跡が待ってるしね」と、明らかに《最果て》への好奇心を隠し切れないような顔をしたヒイロによって却下された。

カインは押しが弱い。

そして今に至る。

「アーネストさん、なんかすみません。俺ら、普通に邪魔ですよね・・・?」

「・・・いや、問題ない。この作戦は本来であれば近日中に部隊の人員が揃い次第決行する予定だった。それに一般人ならともかく、多少の訓練を受けている者であればそう難しくはない任務だ」

茂みの中、カインの申し訳なさそうな言葉に対し兵隊然とした口調で応える若者。

特殊部隊の支給品なのであろう。隠密性の高そうな黒いフィットシヤツに暗緑色のカーゴとベスト（ポケットや留め具がやたら多い）と足首までを覆うブーツ、そして目深に被ったバンダナ姿のその若者は存外に幼い顔立ちをしていた。

歳も自身らとそう変わりなさそうだな、とヒイロも推測する。

事実彼は18歳なので、カインとヒイロの一つ上なだけである。

「あと、俺のことはトウルーサーでいい」  
紛らわしいしな、と最後に付け足すトウルーサー。  
何が紛らわしいのか。

実は、この帝国の陸軍総統はアーネストという男が務めており、そのことを言ったのである。

もちろんトウルーサーとも血縁があり、彼は総統の甥にあたるらしい。

そしてその陸軍総統は、20年前の『革命軍』の主要人物の一人でもあった。

もうお判りだろう。この人選は、簡単に言えば剣帝アレックスに面白がられたものなのだ。

「お、明かりが消えたみたいだね」

屋敷の様子を窺っていたヒイロが抑えめの声量で声を上げる。

さて、今回彼らが請け負わされた任務というのは、とある元貴族の屋敷に不審者が住み着いているので調査し、必要であれば立ち退いてもらう、というものである。

なぜそんな自治体の警備機能的な仕事を軍部が？ とヒイロが疑問の声を挙げたが、それに対し、この屋敷は軍部の管轄だから、とトウルーサーが簡潔に説明した。

ヒイロはその説明だけで何となく察したようだが、カインとユーノはよく判っていないかったようだ。

この帝国には20年前の革命以降、こういった不在の貴族屋敷が目立つようになってきている。

これは『七日間革命』によって、貴族と平民の立場が随分と揺るがされた結果である。

帝国の建国と共に実力主義が推奨され、貴族はその血統に甘えることができなくなり平民は働き次第で成り上がりの機会が増えることになったのだ。

つまり、彼らの目の前にある貴族の屋敷はその荒波に揉まれた末に

耐え切れなかつた貴族の置き土産であり、そしてその置き土産を接収した軍部がこの屋敷の管轄しているということである。

トゥルーサーの事前の調査によれば、現在この屋敷には数人の不審者が住み着いているとのこと。

正確な数字は不明だが、主に出入りがあるのは比較的若い女性と、それより年若い少年と少女だけであるらしかった。

推測するに、家出した未成年の溜まり場みたいになっているのだろう。

屋敷の場所は城壁に囲まれた帝都の郊外である。

屋敷然とした高い塀と帝都ならではの高い樹木に内外を囲まれ佇んでおり、明かりの消えた現在では少しおどろおどろしい雰囲気が見出ている。

「うわー、なんか出そうだねー」

「確かに・・・」

そんな屋敷の様子に嬉々として反応するユーノに若干青ざめているヒイロ。カインもトゥルーサーもその辺は平気なのだろう。特に反応を示すことはない。

「じゃあ、そろそろ乗り込もうか。俺の後に着いて来てくれ」

そう言つて屋敷へと静かに近づくトゥルーサー。

そのまま屋敷の塀に辿り着くと、徐ろに塀の僅かな窪みへと手をかける。

そしてそのままつかかかりの感触をぐつぐと確かめながらスイスイと塀を登つていくトゥルーサー。

取り残された3人はポカーンである。

塀は紛れもない90度。垂直であり、とっかかりも多少の凹凸だけで、並の握力では簡単に滑り落ちるようなものである。それを特殊部隊の兵士はスイスイと登る。

塀の上部まで到達するとそこは少し幅広の庇になっており、ちょうどネズミ返しのように簡単には侵入を許してはくれない構造だ。

トウルサーはというと何の躊躇もなくその庇の端に手をかけ体を壁から離し指の力だけでぶら下がり、あとは懸垂の要領で体を持ち上げ、塀の頭頂部に到達した。

クライマーである。

「ねえ、ついてかなくていいの？ ヒイロ？」

「ごめん、アレはちょっと自信ないや……。向こうから開けてもらおう」

呆気にとられつつ男2人は棒立ちである。

「あれ？ そういや、ユーノは？」

「え？ あ、あそこ」

ヒイロが指さした先には、塀近くにはほぼ同じ高さほどで聳え立つ樹木を何やら確認しているユーノ。

「ユーノ、ちよつと無理っぽいし向こうから開け……」

そこまでカインが話しかけたところで、ユーノが樹の幹を踏み、その反動ですぐ近くの塀を更に踏み体を押し上げていく。所謂三角飛びである。

そして仕上げに塀を力強く蹴り、結構な高さの枝へジャンプし手をかける。

その勢いのまま体を上方へくると回転しその枝へと乗り上げるユーノ。

「ん？ 呼んだ？」

「いいいいです。そのまま進んでください……」

枝の上から不思議そうな顔で尋ねるユーノに対し、カインが気まずげに答える。

彼女は身軽なのだ。

「悪いけど、内側から開けてくれるようトウルサーさんをお願いしといてくれるかな？」

「いいよー」

ヒイロの願いを聞き入れると、更に枝を上るユーノ。

上方の塀側へと突き出た太めの枝まで辿り着くと、その枝を結構な

スピードで走りぬける。助走だったのだろう、その勢いそのまま塀の頭頂部へとジャンプし滞りなくトゥルーサーの元へ。  
残された2人はというと、塀の頭頂部で手を振るユーノに力なく手を振り返すだけであった。

塀の内側へと飛び降りたトゥルーサーとユーノ。

「塀に登るのは流石に無理があったようだ。すまない」

「いいよいいよ。こっちから開ければいいんだし」

男2人を置いてけぼりにしてしまったことを律儀に詫びるトゥルーサーに対し、ユーノが軽く応える。

「しかし、さすが《武神》の娘だ。かなりの身のこなしだった」

「うへへー。トゥルーサーさんだってすごいじゃんー」

「ふむ……」

2人で門扉の方へと移動していると、急に考え込むトゥルーサー。

「どしたの？ トゥルーサーさん？」

「……いや、そこは『君』付けでいい」

「うん、いいよー。じゃあ、トゥルーサー君よろしくー」

きつと彼の何かの琴線に触れたのであるう。

快活なユーノの返事に対し、満足気に頷くトゥルーサーであった。

「気付かれたかもしれない」

暫く進んですぐ、トゥルーサーが不審者の様子確かめるため術を発動し終えたところである。

少し難しげな顔をしながらそんなことを言い出した。

「どうして？」

「さっき使ったのは土属性の魔術で、対象の動きを簡単ながら探知

できるものだ」

「便利だね」

「それによると、どうやら連中は散開しだしたようだ」

「バラバラに行動してるってこと？」

「大まかにしか判らないが、恐らくそうだろう」

トウルサーが使ったのは土属性の初歩的な魔術の一つである。

地面や壁を介し範囲内の人数やその動きを“おおまかに”把握することが出来るものだ。

その誤差は数mプラスマイナスといったところである。

発動に時間がかかり魔力の消費も多いが、索敵にはもってこいの術である。

「どうしようか？」

「そうだな……。やはり相手の人数は3人だけのようだし……」

「じゃあ。私が門開けに行くから、トウルサー君は先に行つて様子見てきて。この道左に行けば玄関だね？」

「ふむ、そうしようか。では、玄関近くで落ち合おう」

ざっくりした作戦を立て、二手に分かれるユーノとトウルサー。軍部の仕事とは言え、未成年相手にそこまで肩肘張るようなものでもないのだ。

門は開いていたが、それを潜った先には誰も待ち構えてはいなかった。

「おかしいな？ 開けてすぐに進んじやったのかな？」

「かもね。まあ、俺らも行けば判るんじゃない？」

少し訝しがるヒイロに対し楽観的なカイン。

門の先は樹木に囲まれた庭があり、暗がりの中を玄関へと続く道が

延びている。視界は悪いが茂みの向こうに見える屋敷の方角を考えれば迷うことはないだろう。

玄関ではトゥルサーが一人で待っていた。

「お待たせです。ユーノは？」

「いや、一緒じゃないのか？ 途中で2手に分かれて、彼女が門を開けに行ったはずなんだが・・・」

「いや、門は開いてたけど、ユーノはいませんでしたよ」

更に訝しがるヒイロと、それに対し首を傾げるトゥルサー。

「ああ、判った」

カインが声を上げる。なにか心あたりがあるのだろう。

「たぶん、迷ったんだ」

「・・・え？ 迷った？」

トゥルサーはカインの言葉がよく飲み込めないのか思わず鸚鵡返ししてしまう。

確かに暗くて視界は悪いが、屋敷もすぐそこ、それほど広くない庭である。

迷うなんてそんな・・・。という意味が表情から見て取れる。

「ところがどっこい、迷うんですよあいつは・・・」

「あー、確かにユーノはコレでも迷っちゃうかもなー」

「え？ この距離で・・・？ え？ ホントに？」

信じらんねえ、と言った様子でカインとヒイロに何度も確認するトゥルサー。

無理もない。しかし、そんな彼に対し幼馴染み2人は無情にも首を縦に振る。無言で。

「すごいな・・・」

その2人の反応に、思わず感嘆の声をあげてしまうトゥルサーであった。

この後、困惑するトゥルサーに対しカインとヒイロによってユーノの方向音痴列伝が語られたが割愛。

「・・・とまあ、とにかくユーノは一人で行動させちゃダメなんで探してきますね」

「ああ、そうだな。合流できたらそのまま索敵してもらっても構わない。相手も散開しだしてるようなので、こっちも別れて行動、俺達も先に進むので順次敵戦力を制圧ということだ」

トウルサーがまたしてもざっくりと作戦を掲げ、カインはユーノを探すため玄関から庭へと戻る。

なんか事態が段々面倒なことになっていくことについては、3人揃って見ないふりをしたようだ。

屋敷のキッチンでは既にユーノが会敵し戦闘が始まっていた。相手はユーノより少し幼い少女である。

低い体勢からの蹴り上げがユーノの顔を掠め、ユーノがその蹴りを片手で捌く。

なぜユーノがキッチンにいるのかというと、トウルサーと別れた後すぐに門まで向かおうとしていたが、気づいたら何故か屋敷の勝手口に辿り着き、中でごそごそしていた少女に話しかけたらそのまま戦闘に突入したというわけである。

ユーノは方向音痴なのだ。

ちなみに、門は始めから施錠されていなかった。

「なんだよお前！ 何しに来たんだよ!？」

あまり高くない背を活かした低姿勢攻撃を繰り返しつつ、男勝りな口調で問いかけるのは正体不明の少女である。

シヨートパンツに簡素なエプロンを着け、手には鍋掴みの彼女。料理中だったのだろうか。

「あ！もしかしてクッキー？ クッキー焼いてた?」

「質問に答えるよ！」

少女の足払いをジャンプで避け、そのまま床には着地せず手近な作業台の上に乗り上げつつ匂いの元を推理するユーノ。

「くっ、ちょこまかと！」

台の上のユーノの足を掴み引きずり降ろそうと引つ張る少女。

「なんの！」

それに対し、体勢が崩れ台に打ち付けないように上半身を捻り手を付くユーノ。

そのまま更に掴まれた足を捻り少女の拘束を解く。

「あ、やっぱりクツキーだ！ 頂きます！」

拘束が解けた途端焼き立てのクツキーを目聡く見つけひよいぱくする。

「あ！ 食うなコラ！」

そしてそんな彼女に振り回されつつ必死で攻撃を繰り返す少女。そしてそれをいなすユーノ。

先程から少女の一方的な攻撃ばかりが続きユーノの防戦一方のように見えるが、そもそも屋敷から立ち退いてもらうことが目的だと思っているユーノとしては、彼女を徒に攻撃するつもりはあまりない。そんなわけで、その後も暫くそんな感じの攻防が続くことになる。

屋敷の庭にてユーノの探索を初めてすぐ。

茂みがかさがさと震える。

「おい、ユーノ。だから一人で行動するなって言って・・・」

“ヒュッ”

「うわっ！」

ユーノを見つけたかと思いかけたところ、突然目の前に刃物が躍

り出る。

それを寸での所で回避するカイン。

現れたのはやはりカインより少し小柄な少年である。

ツナギのような服を着ており、手足の袖を全て捲り上げている。

靴も動きやすそうな運動靴、所謂スニーカーである。

「ちっ」

行動的な服装に反して暗めの顔をした少年が舌打ちする。攻撃の正体は少年の持つ鋏である。剪定用なのかかなり大きめなものだ。

「ちよっ、あつぶない！ 鋏危ない！」

突如現れた鋏に対し、驚きつつも何とか反応することができたカインが思わず素で漏らす。

しかしすぐに連撃。

よく見れば少年は両の手にそれぞれ1本ずつ鋏を持っており、それを交互に突き出してきたのだ。

「うわ！ なに?! なんで攻撃してくんの!?!」

突然の事態に困惑しつつもそれを右へ左へと避けるカイン。

「アンタ誰だよ・・・」

問い掛けつつ、それでも攻撃の手を緩めることのない鋏少年。

両手に持った鋏を同時に、右は脇腹、左は眼前へとそれぞれ刃を開けて斬りかかる。

“ガキインツ”

すかさず抜刀し、その攻撃を両の剣で受け止めるカイン。

眼前を左の逆手で、脇腹を右の順手で。

「・・・クソツ」

「俺は単なる日雇いだよ。てか、鋏とか危ないだろう！ 家で盆栽でも切ってるよ！」

言葉少なに悪態を付く少年に対し、カインの注意だかなんだかよく判らない言葉が振りかかる。

「・・・盆栽と間違えた」

「どづいこと!?!」

会話しつつも両手は拮抗。

ギリギリとお互い力を緩めることはない。

「そもそも、アンタこそ剣の方が危ない……」

“キインツ”

罅迫り合いでは重量的に無理があると判断したのか、鋏を一瞬押し付けその反動で距離を取る少年。

「いいんだよ、コレはなまくらなんだから！」

そう応える間にも少年は迫る。カインから見て右下方へと、重心を落とし視界から外れるように右手の鋏を左から振りぬく少年。

狙いは足下。カインの右剣が逆手であることも考慮していたのかもしれない。

しかし、カインはそれをも捉える。

その逆手の剣をそのまま後方から足元へと、地面を削るように薙ぎ、鋏を受け止める。

“キイン！”

しかし、少年も怯まない。

スピードを落とさず、鋏を当てた剣を起点に右回転。

左の鋏をバタフライナイフのようにくるりかしゃんと逆手に持ち替えカインの後方を抑えにかかる。

ところが、そこでカインが身をかがめる。

正確にはほぼ前転。前方へとその身を転がしつつ半身も回転させ、鋏少年へと相對する。

「……アンタ、速いな」

空振りした左の鋏もそのままに自身の連撃を見事に捌いた相手を思わず褒める鋏少年。

「そっちこそ、鋏って案外武器になるんだな。正直ちょっと面白いじゃないか」

カインも負けじと相手の腕前を称える。

何だこの褒め合い。

玄関を抜け、屋敷内部の搜索を始めていたトゥルーサーとヒイロは、眼前の光景に困惑していた。

ある一室に侵入したところ、価値の高そうな美術品の類が幾つかと、大量の紙幣が見つかったのだ。

「トゥルーサーさん、家出未成年たちのねぐらでこんなのが見つかるのは普通なんですかね・・・？」

ヒイロがトゥルーサーへ問いかける。

「むう、なんでこんな所にこんなものが・・・」  
トゥルーサーもワケが判らないようだ。

「しかしスゴいな。この絵なんて、確かマニア涎ものの作品じゃなかったっけ？」

「どれだ？」

ヒイロが手に持った絵画を差し出す。

そこには思わず感嘆が漏れそうなほど可愛らしくデフォルメ化されたキャラクターのグラフィックがあった。

それは20年前の革命前に弾圧されていた高名な絵師が著したものである。

その絵師は志半ばにして王国の弾圧により捕らえられ獄死しており、現在では彼の作品も大いに価値が認められマニアたちの間で高額取引されていることで有名なのだ。

「よく判らないが、そういうものなのか？」

その辺りへの造詣は深くないのか、そうヒイロへと尋ねるトゥルーサー。

「ええ、有名ですよ。この作者の作品は特に、魔術学の権威であるケイブ氏が有名なコレクターで・・・」

「あっ」

突然何かに気付いたように声を上げるトゥルーサー。

「どうしたんです？」

「いや、ケイブ氏で思い出したんだが……。確か最近、氏の邸宅に賊が侵入し、多くの金品を奪っていったらしいんだ」  
ちなみに件のケイブ氏は帝都在住である。

「えっ、つてことは……？」

「ああ、中には絵画も含まれていたそうで、この絵も恐らく……」  
「その通りよッ！！！」

“バターン！”

「うわあッ、びつくりした！」

話し込む2人の後ろ、突然ドアが大きな音を立てて開く。そしてその音に思わず声を上げるヒイロ。

「話は聞かせてもらったわ。私のコレクションにイチャモンがあるみたいじゃない」

開いたドアから現れたのは1人の女。

上はノースリーブのブラウスと胸まで覆うコルセット、下はローライズショートパンツ、膝までを覆う革のブーツという出で立ちのその女は、見た目も喋り方もそのまんまその手の女王様みたいなソレであった。極めつけに随分と長い鞭まで携行している。

「え……？ 誰……？」

彼女の登場に開いた口が塞がらないヒイロだったが「すげえ格好だな……」という言葉だけは見事に飲み込んで疑問を絞り出す。

「ああ、きつとこのボスなのだろう。調査対象の女と特徴が一致する。他はまさしく未成年と言った風体だったしな」

しかしブレないトゥルーサー。努めて冷静に彼女の正体を推し量る。「まったく。あの子たちに色々と任せていたら、とんだ鼠が侵入してたようね……」

「あの子たち？」

ヒイロが女に問いかける。

「ええ。男の子と女の子よ。でも、会っていないということとは、こ

「こまでは素通りだったようね」

「ああ、ここまでは誰とも遭遇しなかった」

カインとユーノは判らないが、とも考えるトゥルーサー。

「そう……。うふふ　じゃあ、あの子たちは後でお仕置き、ね。」

ペロリと舌舐めずりしつつそう呟く女。

かなり堂に入ったその姿に、お仕置きについてもうちよつと詳しく……。とヒイロが思わず想像してしまったのは秘密だ。

「ふむ。それより、ここにある金品について詳しく訊きたいんだが？」

しかしブレないトゥルーサー。表情ひとつ変えずに女へと歩み寄る。「あら、そんな必要はないわ。概ね、貴方の想像通りで間違いないかと」

「なるほど。だが、それならば尚更、事情を聴くために同行を願いたい」

「……。そんなことより。貴方もよく見ればなかなか可愛らしいわね？　私の下僕にならない？」

近づくトゥルーサーを見下ろして何故か勧誘に持ち込む女。

ちなみに、彼の身長は高くない。

ユーノとカインの間ぐらい、せいぜいカインが相手をしている未成年とほぼ同じぐらいだろう。

軍人らしい落ち着いた雰囲気こそぐわぬ小さめボディなのだ。

「遠慮しよう。公務があるんでな」

しかしブレないトゥルーサー。

仕事を理由にきっぱりと断るその姿に、ヤダ……。この人かっこいい！とヒイロが思わずキュンとしたのはもはやどうでもいい話ではあるが。

「あら残念。だったら……。」

“スパアーンッ！”

女はトゥルーサーから距離を置き鞭を抜き放ったかと思うと、勢い

良く床を打ち鳴らす。

「力尽くで従わせるまで、ね……」  
嬉しそうに頬を歪ませ鞭を繰るその姿は、その手の趣味の者であれば涎ものなのかもしれない。

ここでの戦闘は狭い、とか女が言い出したのでゾロゾロと一緒ロビーに移動した3人。

なぜ素直に従ったのか。さすが女王様なのか。

屋敷のロビーは2階までの吹き抜けとなっており、左右に大きな階段があり、頭上には幾つかの（いつの間にか点灯されていた）シャンドリアがぶら下がっており、まさしく貴族然としたものであった。「さて。もしやか弱い女性1人を相手に男2人で組み敷くつもりじやあないでしょうね？」

「安心しろ。女性を殴る趣味はない」

女王様の更なる我俣に律儀に応えるトゥルーサー。どうやって戦うつもりなのか。

「それに女性の扱いなら、俺より彼の方が適任だろう」

「えっ？」

トゥルーサー、まさかのヒイ口押し。

そんな予想外の展開に思わず素っ頓狂な声を上げるヒイ口。

「えっ、ここに来てなぜ僕……？」

恐ろしくナチュラルな無茶振りに対し、当然の疑問と反応を示すが

「……（コクッ）」

「（えええええ。なんで、大丈夫信頼してますよ、みたいな顔で無言で頷いちゃうのそこで!?!）」

そんな感じで押し切られて戦闘開始。

2分後。ヒイロは床でノビていた。

「あら、靴紐が緩んでるわね」と言っただんな女の胸元に気を取られた悲しき男の末路がそこにはあった。

屈んだ姿勢から放たれた鞭が地を這いヒイロの足元に絡みつき転倒。間髪入れずその鞭はロビーに飾ってあった壺を引き寄せ、ヒイロの頭へと叩き落とされ、そして今に至る。

「まさかこんなに上手く行くとは思わなかった」

と女も少し驚いていたが、男の性サガとは哀しいものである。特にヒイロにとっては。

「むう、卑怯な・・・」

トウルーサーも実は横でちょっと胸元に気を取られていたのでヒイロの気持ちは痛いほど判るのであった。

「仇は取るう」

そう言っただ構えるトウルーサーの左手には長さ40cmほどの棒状の武器。所謂トンファ・バトンが握られていた。

軍人であるトウルーサーはその所属部隊の特性上、警棒やトンファ・バトン、ナイフなどの近接武器の扱いや、殺傷力に重点をおいた極め技を主とした各種近接格闘術を多く仕込まれている。

ちなみに、同様に徒手を主として戦うユーノはその柔軟な身体と抜群のバランス感覚を駆使した身軽なヒット&アウェイを得意としており、ユーノと戦闘状態にある少女はそのコンパクトな身体を活かした低姿勢からの足技を主とした連撃が十八番である。

そんなワケで第2ラウンドの開始。

先制は鞭の一撃。かなり扱いに慣れているのか、その先端は正確にトウルーサーの顔へと叩きつけられる。しかしそれを危なげなくトンファで防ぐトウルーサー。

だが更に鞭が連撃。足元、胴体、頭へと“パアンツ！　パアンツ！　パアンツ！”と小気味よく何度も鞭が放たれる。

もちろん全て防ぎきれぬようなものではない。音速へと差し迫るとも言われる鞭の先端である。如何にトゥルーサーと云えど、それを捉えることは至難の業である。

しかし反面、肌には直接当たらない限りその一撃は非常に軽い。故にトゥルーサーは攻撃を受けつつ距離を詰めるタイミングを見計らっていた。

女の方も決め手に欠けることは自覚しているのである。ヒイ口を倒した時同様に鞭で振り回せられるようなモノを探すため連撃を一旦引く。

当然、その機を逃すトゥルーサーではない。一気に距離を縮めようと女へと駆け出す。

一気に肉薄してきたトゥルーサーに対し、女も冷静に対処する。放たれたのは意外にも徒手である右手であったが、それを難なく彼女から見て左へと躲し距離を取るために前進し反転。

再度トゥルーサーへと対峙する。トゥルーサーは彼女を掴もうとしたのだから空振りである。

「このままじゃ膠着ね・・・」

そう呟く女は、隙を見せるのはマズいと踏んだのか、地味だが少しでも効果のある連撃へ “スパアンツ！ パアンツ！ パアンツ！” と再び移行。

「だが、この場合は膠着の方が望ましいな」

対するトゥルーサーは長期戦を選び、防戦へと徹することに。更には土属性魔術を詠唱。自身を魔術により堅くコーティングする。

「あら、だったらこちらも使っちゃおうかしら」  
ニヤリと微笑む女。

“スパアンツ！”

次の瞬間、トゥルーサーは同時に2箇所への攻撃を受けることになる。

「な・・・ツ?!」

もちろん、2箇所同時への攻撃など防げるワケがない。

「ほうら、まだまだイケるわよ！」

“スパパパンツ！”

今度は3箇所同時攻撃。流石にちよつと痛いトゥルーサー。

「くつ、なんだその術は・・・ツ?!」

「ネタばらしは無粋よ！ さあ、もつと！」

“スパパパンツ！ スパパパンツ！”

3ヶ所同時攻撃の2連撃である。

「ぐあつ！」

トゥルーサーの硬さをモノともしない怒涛の攻撃である。

「こんなことも出来るわよ！」

更に畳み掛ける女。

何が出るのかと身構えたトゥルーサーだったが、次の瞬間彼は宙を舞っていた。

油断したつもりなどない。

だが彼はいつの間にか足を鞭で絡め取られ、そのまま中空へと引つ張り上げられたのだ。

“ドスウウンツ！”

「がはあッ！」

そしてそのまま鞭を繰る女によって壁へと叩きつけられるトゥルーサー。

それにしてもこの女、細腕にそぐわぬ意外なほどの膂力である。

「どう？ 今のはちよつと強烈だったんじゃない？」

「・・・確かに、なかなかの威力だったな。しかも全く動きが読めなかった」

ちよつと背中を痛そうに立ち上がるトゥルーサー。さすがブレない。

「・・・だが、まだまだだッ！」

そして一気に距離を詰める。女が接近戦に弱いと踏んだのだろう。

「ちいっ！」

そしてそれは正解。すぐに距離を取ろうと後退する女。

そこでトゥルーサーが詠唱し右足で地団駄。地響きを引き起こす土

属性魔術、ヒイロたちが応戦したコカトリス亜種の使ったものと同様のモノである。

屋内であればこのように相手を怯ませる程度のものだが。

そしてその地響きにより一瞬動きが止まる女。もちろんその機を逃すトゥルーサーでは無い。

肉薄した勢いそのままに右手で女の袖を掴み、引き寄せ、左のトンファで女の首元を狙う。

迫るトンファに対し思わず仰け反る女。

そしてその機を逃すまいとそのままの勢いでその足元を掬い上げ押し倒すトゥルーサー。

「くあッ！」

ドスンと叩きつけられ、思わず声を上げる女。

殴ってはいないので、さっきの自己申告通りトゥルーサーは一応フエミニストなのかもしれない。

「さあ、同行してもらおうか？」

首元へとトンファを押し付けそう宣言するトゥルーサー。勝負アリである。

「・・・やあん　そんなところ触って、どこに同行させるつもり？」

「む・・・!？」

思わず手を緩めてしまおうトゥルーサー。

流石にちよつとブレてしまったようだ。仕方ないね。

そして刹那の後に女はトゥルーサーの手から脱出を果たし、少し距離を置いた所へと移動していた。

「な・・・ッ!？」

相変わらず全くその動きを捉えることができなかったトゥルーサー。

「なぜ、抜け出せる!？」

「あら、謎は女を引き立てるモノよ？」

ワケが判らないトゥルーサーに対し、女は妖艶に微笑むだけである。

「さて、貴方とはあまり相性がよくなさそうなので、そろそろお暇

するわ」

「な・・・!? ま、待て！」

立ち去ろうとする女に対し、慌てて止めに入ろうとするトゥルーサー！。

“ バタアン！ バタアン！”

「姉貴！」 「お姉ちゃん！」

しかしそんな彼の前に、突如ロビーに入ってきた少年と少女が立ち  
はだかる。カインとユーノが対応していた筈の彼らである。

「ここは明け渡すわ。もちろん宝もそのままね。しつこい男は嫌わ  
れるわよ？」

そう言つて立ち去る女をトゥルーサーは止めることができなかつた。  
正直疲れたし宝も戻ってくるならまあいいか、とも思っていたのは  
内緒だ。

003 : 旧貴族屋敷奪還作戦(後書き)

と言うわけで3話目。

改訂するついでに後書きも書き足しているところだったり。

ところで、行間をもうちよっと開けるように改訂したんだけどどうでしょ？

もっと開いてた方がいいんだろうか・・・。

あと1話につき、1万文字ぐらいを目安に書いてるんだけど、もしかしてそれって多すぎ・・・？

確かに、携帯とかで読むとかなりのボリュームのような気も・・・。

どなたかご意見頂ければ幸いです。

あと、そろそろ4話目あげます。(2011/06/08)

《第4話》

旧貴族屋敷での一件から一夜明け、現在は昼過ぎ。

トゥルーサー、ヒイロ、カイン、ユーノの4人は宿の食堂に集まっていた。

昨夜、盗賊との戦闘を終えたトゥルーサーはその後すぐにカイン及びユーノと合流。

彼自身は軍の宿舎へと、カインとユーノは気絶しているヒイロを（主にカインが）抱え用意された宿へと、それぞれ戻っていった。

ちなみに深夜の作戦だったため、カインとユーノは昼前に起きたばかり。

トゥルーサーは兵士なのでもう少し早めに起床し、作戦の成功とケイブ氏宅の盗難物の件について上司へ報告し、その後カインらの宿へ合流。

作戦中に気絶していたヒイロも少し早めに起床し、眠そうなカインを一度起こして事情を聞き、城のミドルスの元へと報告及び今後の行動について軽く打ち合わせをして戻ってきたところである。

本来報告するべきなのはフェリウスだったが、彼は多忙のためミドルスが窓口となった。

そして現在、時間もちょうどいい頃合いなので宿屋の食堂で昼食を摂りつつ作戦会議が始まったところである。

「《最果て》へ向かうための船を、港に用意してもらってるらしいんだ」

そう切り出したのはヒイロである。恐らくミドルスとの打ち合わせ

で得てきた情報なのだろう。

「そう言えば、用意してもらえって言ってたな」

カインが思い出しつつ応える。《最果て》までの移動手段は（温情として）政府側に用意してもらえろという話は昨日の時点で出ていたものだ。

「ってことは、港までは徒歩移動？」

ユーノが尋ねる。港は帝都から十数kmほど南下したところであり、時間はかかるが徒歩で行けないこともない距離である。

「うへえ、出来れば馬車か何かで移動したいところだよなあ・・・」  
馬車で行けば1〜2時間ほどの行程で済むので、かなりの短縮になるのだ。カインの呟きも尤もだろう。

「どうする？ 路銀もあるし、乗合で行ってみる？」

ヒイロが言うのは帝都と港を繋ぐ乗合馬車のことだ。ちなみに、路銀は政府から貰ったものなのでこちらも無理な話ではない。

「ふむ・・・。なんだったら、軍部の馬車を調達してみようか？」  
それまで黙っていたトゥルーサーが切り出す。

「いいんですか？」

「ああ。軍部なら融通が利くし、御者も俺がやればいいしな」  
カインが確認に快く応えるトゥルーサー。

「それは助かります！」

「ありがとう！ トゥルーサー君！」

「まあ、この程度ならな」

ヒイロとユーノも異論なしと礼を言い、実際さして手間でもないのだろう、トゥルーサーもなんてことないと返す。

「じゃあ、食べ終わったら馬車を取りに行ってください」

「判りました。僕らもその間に準備しておきます」

《閑話休題》

ガタガタと速歩のスピードで2頭立ての幌馬車が走る。

幌の中にはヒイロ、カイン、ユーノの3人が乗り、御者台にはトゥルーサーが陣取っている。

「ところで、トゥルーサーさんは軍部のどこの所属なんですか？」

御者台のトゥルーサーに対しヒイロが尋ねる。

「陸軍特殊部隊だ。主に昨日のような雑用が仕事だ。・・・あと、俺のことは呼び捨てで構わない。歳も一つしか違わないし、先も長くなるだろうからフランクな方がいいだろう」

「うーん、それはさすがに呼びづらい気が・・・」

少し固いイメージがあるからだろうか、躊躇するようにそう応えるカイン。

「まあ、慣れてからでもいいさ。但し敬語は抜いてくれ。こっちまで気を遣ってしまう」

「そういうことなら判りま・・・った！」

「なにその軌道修正」

ヒイロの貴重な突っ込みシーンである。

「トゥルーサー君は、一人暮らしなの？」

それまでに流れをぶった切り、唐突に別の質問をするユーノ。

「ああ、軍部の寮住まいだ。ちなみに男子寮」

「男子寮・・・。大変そうだなあ色々・・・」

寮とやらのゴミゴミとした雰囲気を想像したのか、そう呟くカイン。  
「ああ、大変だよ。特に入ったばかりの時は貞操を守るのに必死だった」

「貞操!？」

「ああ、おかげで俺も随分と趣味が変わって、今じゃ年下の男子の後ろ姿を見るとこう・・・」  
「怖っ!」

「まあ、冗談だがな」

「真顔で言わないで！」

カインのツツコミが冴える。ボケ要員は増える一方だ。

「グレイブ総統は叔父さん・・・なんだっけ？」

「ああ、あの頭の固い総統のイメージからか、俺もクソ真面目だと思われがちなんだ」

ヒイロの質問に補足しつつ答えるトゥルーサー。

「確かに、トゥルーサー君はそうでもなさそうだね」

「ああ、多分父親に似たんだろう」

「父親？ ってことはグレイブ総統のお兄さんだっけ？」

カインが尋ねる。実は、彼の父親スタンリー・アーネスト元陸軍中尉も弟である現総等と共に革命軍に参加していた有名人なのだ。というか、彼自身が十二分な程のサラブレッドである。

「早くに亡くしたから俺も詳しくは知らないけど、たまに総統に恨めし気にこう言われるんだ。お前はアイツに似て真面目な顔してふざけているから厄介だ、ってね」

「なるほど、確かにそうかも」

ヒイロが面白がって納得する。

「だからまあ、気楽に接してもらえると助かる。というか、軍の連中だと堅苦しいところがあるから、その方が楽なんだ」

「にしても、さっきの冗談はタチが悪かったよ。つい身構えちゃったし」

「安心してくれ、男色のケはないさ」

「じゃあ、私の方が危険だったり!？」

カインが冗談交じりに糾弾し、トゥルーサーが受け流す。そして何故か息巻くユーノ。

「・・・今後の成長に期待しよう」

「あー、もつとこう凹凸あった方がいいみたいだねえ。」

「どんまいユーノ」

「3人とも蹴り落とすよ」

失礼なことをのたまう野郎3人を笑顔で脅すユーノであった。

「お、あんな感じとか凹凸凄いいんじゃないか？」

さすがに殺気がやばかったのか前方へと視線を戻したトゥルーサーが、何かを見つけたのか他の3人へと声をかける。

「えっ！　どんな感じ?!」

「珍しい、ヒッチハイク？」

迫真で食いつくヒイロと、なんだか珍しい光景に少し驚くカイン。

「あー、確かに凄いねアレは。でも、いい加減怒っていいよね私」

殺気を膨らませるユーノに対し、息巻く野郎3人衆。彼らの視線の先には、ふくよかな胸部が目立つ女性がその手に持った杖を掲げ道の端に立っていた。巨乳の登場である。

幌馬車は身元不明のヒッチハイカーを難なく受け入れていた。男性陣が驚くほどスムーズに彼女を引き上げたのだ。ユーノが若干冷たい目を向けていた気がするが、気のせいだろう。

「ありがとうございます。助かりました」

改めて進み出した幌馬車の中、そう丁寧な物腰で礼を述べたのはヒッチハイカーの女性である。

シンプルだが上質そうなブラウスとクリーム色のワンピースを着こなし、明るいブロンドの巻き毛や一つ一つの所作なんかが育ちの良さを表している。

「いえいえ、困った時はお互い様ですよ」

それに対し爽やかげに返すヒイロ。

「なあ、誰かそろそろ御者交代しないか？」

「ごめんやったことない」「私も」「どんまい」

「くっ……」

闖入者と親交を深めたかったトゥルーサーの提案はすげなく却下。  
どんまい。

「ところで、港までお送りすれば良かったですか？」

「・・・港・・・ですか？」

ヒッチハイクなので当然行き先が港の方なのだろう、そう考えたヒイロが女性に確認するが、彼女は不思議そうに小首を傾げるだけであつた。上目遣いと連携があざとい。

童顔なためか、その仕草も妙に様になっていて可愛いじゃないかと男2人とユーノまでもちよつとキユンとしたりしたがそれはどうでもいい。

あと、位置的に会話に入れないトゥルーサーの背中がちよつと寂しげだ。

「いや、ここは港へ向かう道ですからね。そこでヒッチハイクしたので、港へ向かうってことでいいですよ？　という確認でして・

・・・」

「・・・ああ、港へ向かう途中なんですねえ。いいですよ、そこまでお願いします」

ワントンポ遅れ、頭を下げながら答える女性。ちなみに応対は全てヒイロである。

カインはこういう時は役立たずなのでしょうがない。

「・・・ええつと、お姉さんはどこから来たんですか？」

「・・・お姉さん・・・？」

なんかちよつと雲行きが怪しくなってきた遣り取りに、それまで様子見していたユーノが助け舟を出す、女性は再び小首を傾げながら自分を指し示す。

ユーノがそれに対しコクコクと首を縦に振って応え、女性が両手をポンと打ち合わせ満面の笑みを浮かべる。

「お姉ちゃんって呼んでもいいですよ」

その直後しばらく野郎2人が無言で悶絶したのは言うまでもないだろう。そしてド正面でそのスマイルを受け止めたユーノはと言うと

「・・・カイン、ヒイロ君。ヤバイよこの人かわいいよ！」  
長い沈黙をそんな言葉で打ち破った。

ユーノ自身もだいたい天然入っていると見られがちだが、彼女とは根本的に種類が違うのだろう。

テンポ的な意味で。

なによりユーノの行動は実はちょっと意識的に行なっているところがある。

けして計算高さからではないが、その方が自身の行動がスムーズに運ぶことをユーノは無意識に知っているのだろう。

「えーっと、それで、どこから来たんですか？」

なんとか持ち直したのか、そうヒイロが尋ね直す。

「はあ・・・、それがよく憶えていなくて・・・」

「憶えてない・・・？」

予想外の答えに思わずオウム返ししてしまいつつ、続けて尋ねるヒイロ。

「えっ、じゃあなんで道端で？」

「それはですねえ、どうやら先程まで草むらのところでお昼寝してしまっただようでした・・・。でも、近くで馬車の音が聞こえたので・・・？」

「・・・？」

「聞こえたので・・・？」

小首を傾げなら唐突に止まる女性の説明。ヒイロが続きを促すも、女性も考え込んでいるのか暫く続く沈黙。

「・・・あの、つかぬことをお伺いしますが・・・」

「はい？」

意を決したようにそう切り出してきた女性の質問は・・・。

「・・・私は、何処から来て、何処へ行くのでしょうか？」

随分と哲学的なものであった。

記憶喪失である。

その後女性から詳しく状況を聞いたところ彼女からは、普段の動作や話し方までというワケではないものの意識を失う直前の行動はおろか、名前・年齢・出身地などの自身に関する情報すらもすっかりと抜け落ちてしまっていた。

そして現在は幌馬車内の3人で彼女の持ち物（とは言っても小さなウエストバッグとポケットの中と杖ぐらいだが）を検め、出来るだけ彼女の情報を引き出そうとしているところである。

「あ！ これ名前じゃないかな？」

ユーノが何かを見つけたのか声高に何かを掲げる。

その手には一冊の小さなノート。裏面には確かに名前らしきものが書かれてあった。

「おお、どれどれ？」

「ふい、フィア・・・さん？」

ノート受け取りそれを検めるヒイロ。カインも覗き込み、滲んで殆ど読めなくなってしまうている文字の最初の方の文字列を読み上げる。

実際どこかでノート自体が水に浸かってしまったのだろう。その感触はやたらとごわごわしており、ノートの中身も殆ど滲んで潰れてしまっている状態であった。

名前らしき文字列も最初の数文字しか読めず、中身の方もどうやらスケジュール帳的なものだったのだろうということしか判らなかつた。

「じゃあ名前はフィアさんでいいとして、これからどうしよっか？」  
ユーノが皆を見回し尋ねる。

「とりあえず、港に着いたら診療所にも行ってみるしかないだろうね・・・」

ヒイロが妥当な提案をする。

「なんだかお手間を掛けさせてしまい申し訳ありません……。私  
つてば忘れっぽいんですかね……。？」

記憶喪失自体はさほどショックでもないのか、随分とのんびりとし  
た感じでそうユーノらに頭を下げるフィア。忘れっぽいどころでは  
ない。

「なあ、ところでさっきから別の馬車の音が聞こえてくるんだが、  
後ろから来てるのか？」

それまで御者に集中していたトゥルーサーが荷台へと声をかける。

荷台の4人は会話を中断し耳を澄ますと、確かに自分たちのものと  
は別の馬車の音が後方からゴロゴロと響いてきていた。

すぐにヒイロが荷台の後ろへとその姿を確認に向かう。

「音からすると向こうのが急いでるみたいだね。道譲った方がいい  
か……。もおおお！？」

幌布を捲り上げ外を確認したヒイロの語尾が、何を見たのか不自然  
に引き伸ばされる。

「どうしたのヒイロ君？ 牛なの？」

「ち、違う！ 牛じゃない！……。虫だ！」

“バシユウウウ！”

ヒイロが後方から目を逸らし、ユーノたちの方へ向き直る。

同時に何かが噴き出るような音。

「虫？」

“ズダアアアン！”

ユーノがヒイロの訳の判らない回答に疑問を浮かべた瞬間、荷台の  
すぐそばで爆音が轟く。

「うおおあああ！ なにごと！？」

突然の爆音に目を白黒させるカイン。他のメンツも爆発に驚いたの  
か動けずにいる。

「何だ、何があった！？ さっきの爆発は何だ！？」

本当にすぐ近くで爆発したのだらう。御者台にいたトゥルーサーが  
荷台へと目を向けると、爆風に耐え切れなかったのか幌布が荷台の

端に辛うじて引つかかっているような状態になっていた。

しかし、そのすっかり役に立たなくなってしまった幌布の先も爆風で巻き上がった土埃がもうもうと隠してしまっていた。

「げほっ、えほっ・・・」

「何なの、何が爆発したの今・・・？」

ユーノが咳き込みながら、ヒロが状況を飲み込めないままそれぞれ復活。

ちなみにフィアは爆発に驚きすぎたのか目を回してフリーズ中である。

「判らんが、後ろから来てる馬車が原因じゃないのか？」

トウルーサーが後方へと声をかける。

「そうだ、あの虫馬車だ！！」

「はあ！？ 虫馬車ってなんだよ！？」

「アレだよ！！」

ヒロが指さした先、そこには土埃を掻き分けるように走る馬車と、それに追従するように周囲を飛び回るかなりの数の虫たちが、自分たちの馬車へと迫ってきていた。

明確な敵意と共に。

「ビビってる、ビビってる」

楽しそうに笑うのは大きなゴーグルと耳当てのようなものをした赤い髪の女。

「当てちゃえばよかったのに・・・」

そう呟くのは赤髪と同様のゴーグルと口元を大きく覆い隠すマスクをした黄色の髪の女。

「馬鹿。当てたら荷物もダメになっちゃっうでしょ」

2人を注意するのはゴーグルだけを装着している青い髪をした女。それぞれ、生まれ、注意、進め、と言ったところだろうか。彼らが乗っているのは言わずもがな、カインらの乗った馬車の後方を走っている件の虫馬車である。

「この調子でドンドン爆破してやる！」

「ちょっと！ ホントに荷物まで巻き込まないでよ！」

「だーいじょーうぶだって！ 火薬抑えめで行くからさ」

「・・・私の出番無さそうだし、終わったら教えて」

「アンタは寝るな！」

「そうだぞー。だいたいアイラの睡眠薬の効き目が弱かったから・・・」

「」

「・・・ミリアもちゃんとトランク閉めてなかった」

「2人ともちゃんとやんなさいよ！ ミリアは花火であの馬車をなんとか足止めして、アイラも出番あるかもしれないから寝ないの！

ていうか、手綱握ってて！」

「むう、判った・・・」

「へいへい。んで、ナヴィはどうすんのさ？」

「私はこれから虫たち使って荷物拾った連中何とかするのよ！」

楽しそうで喧しい赤髪はミリア、口数が少ない黄髪はアイラ、そして真面目そうな青髪はナヴィ、とそれぞれ呼び合っているようだ。

まさに、女3人寄れば姦しいを体現する連中である。

そしてそのまま、かしまし娘たちの攻撃が開始された。

“バシユウウウ！”

再び噴出音を発しながら何かがちらへと向かってくる。

正面から見ると判りづらいが、それはよく見ると30cmほどの細

い棒状で先端が少し膨らんでいる飛行物体のようだ。

「マズい！ ユーノ！ 氷弾でアレ撃ち落として！」

それを目視したヒイロがその後の展開に気付いたのかユーノへと咄嗟に指示を出す。

「判った！」

その指示に応え、すぐに氷弾を目標へと撃ち出すユーノ。

ちなみにユーノは水属性も使うが、本来はこういった氷属性魔術を得意としている。

“ズダアアアン！”

しかも命中精度もそれなり。氷弾が当たり、馬車へと届くことなく爆発する飛行物体。

ヒイロの読み通りである。

一方、ユーノが馬車後方で飛行物体を撃墜している間にも側面へと虫たちが迫ってきていた。

「うわあああ！ 虫来た！ コレどうすんのヒイロ！？」

「どうするもこうするも、叩き落すしかない！」

悲痛な声を上げるカインに対し、自身も刀を抜き放ち、群がる昆虫どもを斬り伏せながら叫ぶヒイロ。

「き、気持ち悪いいいい！」

サブイボ立たせながらも双剣で必死に応戦するカイン。

「またデカイ音したけど、後ろで何が起きてる！？ていうか、虫が凄いいけどなんだこれ！？」

ここに来て御者台のトゥルサーも混乱の渦中へ。

「急に攻撃されて僕らもよく判らない！ とりあえず、スピード上げて後ろの馬車振り切って！」

「了解！」

ヒイロの指示にスピードを上げる馬車。

しかし、相手の馬車はともかく虫たちは飛んでいるのだ。すぐに何匹もの奴らに追いつかれてしまう。

ユーノもいつの間にか虫たちを叩き落とし始めている有様だ。

「コラアアア！ お前ら、止まれええええ！ あとそいつ返せええええ！」

暫く虫たちを必死で叩き落としていた3人に突如罵声が浴びせられる。

声の主は彼らを追う馬車の上、赤い髪の女だ。

「ソイツ・・・？ ああつ！ ファアさんか！？」

赤髪の言葉の意味を理解したのか、ヒイロが昏倒しているファアへと視線を向ける。

「ヒイロ、あいつらの狙いつてファアさんなのか？」

群がる虫たちを双剣で斬り払いながら、ヒイロへと尋ねるカイン。

「多分、そうだろうね・・・」

“バシユウウ！”

「ヒイロ君、またアレが来る！」

三度噴出音。爆発する飛行物体が迫る。

「くっ！ ユーノもう一度・・・いや、トゥルーサー！ 一旦スピード下げて！」

さっきと同様ユーノの氷弾で撃ち落とそうと指示を出そうとしたヒイロだったが、急遽それを取り止めそのまま御者のトゥルーサーへと減速の指示を出す。

「・・・！？」

状況が掴めないながらも、指示に従い手綱を少し引き寄せるトゥルーサー。

「おいヒイロ、どうすんだ！？ 当たるぞ！」

馬の嘶きとともに減速する馬車。当然縮まる飛行物体との距離。もう目と鼻の先だ。

「カイン！ 任せた！ 投げ返せ！」

「はあッ！？」

ここでまさかの無茶振り。しかし、考えてる暇はない。飛行物体は今にも着弾する寸前である。

「ああもう、ちくしょう！ ユーノ伏せて！」

馬車後方、ユーノの隣へと躍り出るカイン。

伏せるユーノの頭上近く、カインのほぼ真横であるそこを飛行物体が駆け抜けようとしたその刹那。

その動体視力により軌道を捉え、その反射神経により飛行物体の柄に当たる部分をタイミングよく引っ掴むカイン。

「お返しだあああ！」

そしてそのまま投擲。

「今だトゥルーサー！ 加速！」

叫ぶヒイロ、再び嘶き。

“ズダアアアアン！”

次の瞬間、そのベクトルを180度反転させられた飛行物体の着弾音が轟く。

今度は自分たちではなく、相手の馬車の近くでだ。

「やった・・・！ 出来た・・・！」

「さすがカイン！ 信じてた！」

「ヒイロ、お前なあ・・・」

「まあまあ。でも実際出来るとは思ってたよ。だってアレ・・・」

「判ってるよ、確かにアレは・・・」

「矢に比べれば遅い」

2人の声が重なる。実際、さっきの飛行物体は放たれた矢に比べれば遅いものであった。

そして以前、実際の弓矢を用い、迫る矢を斬り落とす練習をしていたことのある彼らである。

しかも唯一撃墜に成功したカインにしてみれば、迫り来るそれを斬り落とすだけでなく、掴み、投げ返すぐらいやってのけて然るべきなのだ。（とは言っても常人には到底不可能な領域ではあることは間違いないが）

「でも、コレで向こうも迂闊にアレを撃ってはこなくなるだろうね・・・」

ヒイロはそう呟き、今しがたようやくの反撃に成功した相手馬車を

見やった。

その馬車の上、3人娘は流石に固まっていた。

直撃は避けてはいたものの、その予想外の反撃にフリーズ中である。

「えっ、何でこっちで爆発したの・・・？」

「なんか、投げ返されたように見えたけど・・・？」

赤髪のミアリアも黄髪のアイラも状況が飲み込めないのか呆然とそう呟くばかり。

「見えたんじゃないかって、投げ返されたのよ！」

一人持ち直したのが青髪のナヴィがそう言い放つ。

「・・・えっ？ あの火花を素手で投げ返したってこと？・・・えっ？・・・馬鹿なの？」

「まあ、多分馬鹿みたいに反応速度がいいんでしょうね！」

何時まで経っても事実を受け入れきれないアイラに対し投げやりに戻すナヴィ。

「くっそー！ もっと撃ち込んでやるッ！」

「やめときなさい。また返されたら流石にマズいわ」

そこでようやく復活したのかそう吠えるミアリア。しかしすぐにナヴィが諫める。

「あんなのマグレだって！」

「・・・マグレじゃないかも」

「ぐう・・・」

アイラの追い打ちに流石に押し黙るミアリア。

「アイラ、いい手はない？」

「・・・今は吹き矢しかない・・・」

「いや、あるんなら最初から使いなさいよ」

「・・・コレ、結構疲れる」  
ナヴィに責められつつも渋々吹き矢を構えるアイラであった。

「痛っ！」

虫を叩き落す作業に戻っていた馬車の上、突然自身の肩を押さえ蹲るユーノ。

「どうした!？」

「判んない。ちよつとチクつときて・・・」

作業の手を止め駆け寄る男2人にそう返すユーノ。

「どこ? 診せて?」

「らい丈夫、多分虫に噛まれちゃったによ・・・? う・・・?」  
呂律が回っていないあざとい話し方をし始めたと思っただらそのままバタツと倒れこむユーノ。

「おいおい、大丈夫か?」

カインが慌ててユーノを抱え込む。

「ああ・・・、こえ、ろくだ・・・。ごみえん、わらひむい・・・」  
当のユーノはというと目を回してカインに身を預けるのが精一杯のようだ。

「多分、これのことだ・・・」

ユーノの肩の様子を診ていたヒイロが羽のついた細い針を取り出す。

「ヒイロ、それって・・・!？」

“トスツ”

「いて」

「えっ?」

「ああ! しまった!」

そういつつ背中から針を抜き、指し示すヒイロ。

「毒針だ！ カイン気をつけ・・・うつ・・・！」

「おい大丈夫か、ヒイロ!?」

「痒い！」

そう叫ぶと突如として体中を掻き筆り出すヒイロ。

「か、体中が痒いいい！ なんだよこの毒!?」

「だ、大丈夫そうだな・・・」

「全然大丈夫じゃない！ カインも気をつける！ こんな小さい針じゃ流石に叩き落とせない！」

そう叫びながらも身体を掻くのを辞められないヒイロ。どうやら相当痒いらしい。

“トスツ”

「あた」

「え」

「しまったああああ！」

「大丈夫か!? ああもう、痒いいい！」

「クソ、今度はどんな・・・は・・・は・・・」

太腿から針を抜くカインだったが、その言葉が突如として遮られる。

「は・・・?」

「・・・ハックシヨイ！」

くしゃみによつて。

「えええええ」

「・・・ヒイロ、もしかして・・・ブエックシヨイ！」

「うん、くしゃみだね。うう、痒い痒い痒い」

「くっそ、なんて毒・・・ヘアックシヨイ！ ハックシヨイ！」

「・・・ふらりとも、わらひがひま、はいふく・・・」

こうして呂律の回らないユーノ、体中を掻き筆るヒイロ、くしゃみが止まらないカイン、というカオスが完成した。緊張感は皆無だが絶体絶命である。

「おい、大丈夫かみんな!? なんだ!? 後ろで何が起こってる?!」

そのカオスに流石のトゥルーサーも後ろを振り向き確認する。

「トゥルーサー！ 毒針でみんなやられ・・・フェックシヨイ！」

「なんとなく判った！ 全力で逃げよう」

「大丈夫です」

全速力を出すためその手綱を握り直そうとしたところのトゥルーサーにそんな声が掛けられる。

「えっ・・・？」

「ファイア・・・さん・・・？」

突然の声と立ち上がった人物に驚く男3人。ユーノは目を回していてそれどころではない。

「もう皆さんを傷つけさせたりしませんから」

視線の先、凜としたその声はさっきまで気絶していた記憶喪失天然娘ファイアのものであった。

そして彼女はその手に持つ杖を掲げ、詠唱を始めていた。

光りだす杖。正確には杖上部に嵌めこまれた丸い宝石だろうか。

詠唱によって宝石の前面に円状の文様が浮かび上がりゆっくりと回転しだす。

続く詠唱。文様は一気に大きくなり馬車をその円内へと収めるようにそのまま分裂を始める。

同じような円状文様が幾つも出来上がり、それぞれが馬車全体を包むように縦に並ぶ。

“ キンツ ”

馬車後方で金属音が響く。

「もしかして針が防がれた・・・！？」

「いや、針だけじゃない。虫たちも」

カインのその声に気づき見渡せば、さっきまで果敢に攻め入ろうとしていた周囲の虫たちが明らかに文様によって阻まれている。

「ていうか、僕たちの毒も・・・？」

「ホントだ・・・、治ってる・・・？」

「うう・・・。2人とも大丈夫・・・？」

いつの間にか痒みもくしゃみも止まっていた男2人に加え、一番重症であった筈のユーノすらも復活していた。

「えっ……？　ファイさん……？」

ユーノもファイアの現状に気づいたのか、光り輝く彼女（正確には彼女の杖だが）へと声をかける。

「もう大丈夫ですよ」

ニコツという擬音がしそうな笑みをユーノへと向けるファイア。

「女の子を傷つけるなんて……」

彼女はその笑みを湛えたまま杖を更に掲げる。

「おしおきしないでですね」

笑みを深くしたファイアが更なる詠唱を後方へと向けた。

前方の光る馬車の中心。《荷物》の掲げた杖が一層激しく輝く。

その瞬間、ナヴィの背筋に尋常ならざる悪い予感が駆け巡る。

「ミリア、起きて！」

咄嗟の判断。

「なんだよー。もう私の出番無いんだろー？」

ナヴィの声に後方で暢気にふて寝していたミリアが不満げに体を持ち上げる。

次の瞬間、彼女らの馬車の中心線上を音も無く光が迸る。

2頭の馬の間。ナヴィとアイラの間。体を持ち上げたミリアの顔の真横。

「えっ……？」

一台の馬車が二台のそれへと引き裂かれていた。

“ドガツシャーン！”

馬の嘶きとともに後方の馬車だったものから轟音が鳴り響く。

トウルサーを除いた3人は呆気にとられ、ファイアを注視していた。

「ふう……、皆さん大丈夫ですか？」

一仕事終えた感で、その3人へといい笑顔を振り撒くファイア。

「……ひ、光属性魔術……!？」

絶句していたヒイロが、辛うじてそう絞り出す。

「ふい、ファイアさん、いつたい……？」

「凄い……!」

驚愕を隠せず動揺を見せるカインに、アレだけの規模の魔術に驚嘆を示すユーノ。

「なあ、もうスピード落としても大丈夫なんだよな……？」

前方に集中していたため今ひとつ状況飲み込めずにいるトウルサー

ーだけが、健気に馬の手綱を繰るのみであった。

気づけば、港まで残り僅かとなっていた。

「し、死ぬかと思ったー！ ていうか、アレが私らの《荷物》なワケ?!」

「そうよ」

「……聞いてない……」

「私もよ」

馬車だった物の残骸とともに転がる3人娘。

「仕方がないわね。上に報告して、救援物資追加してもらいましょ

う

「ちくしょー！ 次こそ爆破してやるー！」

「・・・毒、もっと必要・・・」

それぞれに次回の奪還へ向け思考を切り替えるあたりまだ折れてはいないようだ。

「にしても、あの『魔術』とやらは厄介ね・・・」

「確かに！ 聞いちゃいたけど、スゲエなー！ 爆発できるかな！？」

「・・・スウー・・・」

「どうでしょうね。まあ、対策は必要になってくるわね。あと、ア  
イラは起きなさい」

「道端で寝たら風邪ひくぞー！」

「・・・ねむい」

3人娘はやられてもただでは起きないのだ。具体的に言えば、寝てから起きる。

004 : 港へ(後書き)

4話目やっと投稿でできたー！

待ってないかもしれないけどお待たせしました！

1万文字も何とかクリア！

というワケで次も時間かかるかもですがなんとか頑張ります。

誤字脱字の指摘とか、字数多いとか、読みにくいとか、早く書けとか、そんななんあったらどうぞお気軽にー。あと感想も。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2879q/>

---

クロニクルズクロニクル ~eight irregulars~

2011年10月8日14時50分発行